

篠崎隆雄作

大津皇子（おおつのみこ）

（飛鳥よ、幼子の寝息が如く）

時 所

飛鳥浄御原時代

望楼・吉野川原・吉野離宮・望楼・磐

余の池・西の寺院・望楼・大津の館・丘

の上・真木備の館・大王の寢室・夜道・

宮中及び斎宮の部屋・外苑・刑場への道

・二上山山頂

装置

多場面に渡るので、抽象的なものとし

たい。舞台中央奥に巨大な台状のもの。

上手、下手前面に小ぶりのもの。台は、

時に巨大な巖となり、丘となり、居室と

なる。回転、分離、合体可能なものとし、

他の可動パネル等と組み合わせ、各場

面を作って行くものとする。

迅速な転換が望ましい。

登場人物

大津皇子（おおつのみこ）（天武帝三男）

草壁皇子（くさかべのみこ）（天武帝次男）

高市皇子（たけちのみこ）（同長男）

黒衣皇子（こくいのみこ）（正体不明）

大王（おおきみ）（天武帝）

后（きさき）（天武妃、後の持統帝）

大名児（おおなご）（舞姫）

人麻呂（ひとまる）（草壁の従者、歌人）

菊香（きくか）（その恋人。宮女）

津守連（つものむらじ）（後の寵臣）

川島皇子（かわしまのみこ）（大津の友人）

忍壁皇子（おさかべのみこ）（同じく）

大来皇女（おおくのひめみこ）（大津の姉）

真鳥（まどり）（大津の臣）

真木備（まきび）（その伯父）

菘野（はぎの）（その妻。語り手を兼ねる）

大伴磯成（おおともいそなり）（延臣）

物部音檉（ものべのおとかし）（同じく）

橘男足（たちばなのおたり）（同じく）

河辺皇女（かわべのひめみこ）（大津の妻）  
行心（こうじん）（高句麗の僧）  
花荻（はなおぎ）（宮女。高市の愛人）  
浜木綿（はまゆう）（同）  
楓（かえで）（同）  
八重葎（やえむぐら）（同）  
鹿島（かじま）（津守の腹心）  
多波田（たはた）  
麻呂（くにまる）  
志貴皇子（しきのみこ）（子供）  
その他、兵士、人夫たち、多勢。

第一幕

プロローグ

暗闇の中に老女菘野が浮かぶ。

菘野 皆さまは、壬申（じんしん）の乱と

言うのをご存知でしょうか。天智の大  
王（おおおきみ）の子大友皇子と皇太弟  
大海人皇子（おおあまのみこ）、後の天  
武の大王の間で争われた戦いで御座い  
ます。ことの成り行きは、こうでござ  
いました。初めあの琵琶湖のほとりに  
都を開いた天智の大王は、勲功甚だし  
かった弟大海人皇子に大王の位を譲る  
ことを約束したのでございます。とこ  
ろが御子息大友皇子の成長に伴い、そ  
のお考えが変わって参りました。子故  
の闇と申しましょいか、ご自分の嫡子

に大王の位を継がせたいと思いはじめたのでございませぬ。病床に伏せつた天智の大王は、大海人皇子をお招きになりませぬ。これには何かある。身に危険が及ぶだろうと察した大海人皇子は、自分本来の願いは出家にある、どうか皇太弟の地位を退かせて欲しいと。そして最愛の妻鸕野皇女へのひめみことと少数の手勢を連れて吉野の地に御逃れなつたのでございませぬ。この模様を、当時の書物は、一虎を野に放つが如しと一と書いております。大友皇子たちは、天智の大王の死とともに、大海人皇子に兵を向けませぬ。人望厚い大海人皇子の陣営には、多くの地方豪族たちが馳せ参じました。次の大王の位を廻つての叔父と甥との戦い、これが壬申の乱でございませぬ。体内に同じ血を引く者同士が、血で血を洗うような戦いでございませぬ。やがて乱は、収束。

大海人皇子側の大勝利で御座いました。次の大王となられた大海人皇子は、近江の都を廃し、祖先以来の明日香（あすか）の地に再び都を開くこととなりました。日嗣皇子（ひつぎのみこ）、皇太子には鸕野皇女との間にお生まれになった草壁皇子がお立ちになりました。これでめでたし、めでたしと行けば宜しかったのです。が・・・。

## 第一場

望楼（中央の台）。一面の星空。后と津守連

津守連 おおまた一段と光を増した。

后 あの星が隣の星の光を奪っているというのですね。

津守連 一月ほど前までは、二つ並んだ星は同じく光り輝いておりました。ところが

日が経つにつれ・・・。  
一方の星の力が衰えた。光奪われた  
の。我が子草壁の星。奪ったのが大津の  
星と。  
津守連 御意。  
后 大津は、死んだ姉に似て心優しい子。  
けして草壁の力を奪うことなど・・・。  
私には信じられません。  
津守連 星々の俄かの動きは、古来よりこの  
世の動乱の予兆といわれております。か  
の壬申の乱の時、多くの星々が吉野の地  
に向って流れました。天命は大海人皇子  
にありとの予兆だったのです。それを知  
った豪族たちが、みな吉野の池に馳せ参  
じたことをよもやお忘れではございませ  
まい。かくいう私もその一人。ゆめお疑  
いになつてはなりません。  
后 嗚呼あの星が一段と光を失つて・・・。  
そんなことがありうるのだらうか。

第二場

鳶の声。水の音。三つの台は、巨岩を想像させる。ここは吉野川の川原。中央の台の陰に舳い舟。宮女たちの「大名児（おおおなご）様」「大名児様」と探し求めめる声。ややあつて宮女花荻、浜木綿、菊早、葦水、桜子が来る。花荻は、年長。

宮女たち大名児様。大名児様。

花荻 何処へ行っちゃまったんだろ。うね。

浜木綿 草壁皇子様がお呼びだというのに。

楓 早く見つけ出さないと、またお小言

だわ。

出雲 たまんねえ。

八重葎 どんなお仕置きを受けるか。・・。

花荻 いったい見張りは何してたんだろ。

ね。

浜木綿 また考え事をしていたに違いないわ。

花荻 考え事と言うのは、人間のすることだ

よ。猿のすることじゃないよ。  
出雲 猿は、山へ帰るべきなんだな。  
小海 私もそう思う。  
菊香 そう言っつては可哀想だわ。あの人は歌  
を考えていたのよ。美しい言葉を紡ぎ  
だそうとして、日夜考え続けているん  
だから。  
花荻 あんたも物好きだね。あんな男のどこ  
が好いのさ。  
菊香 将来は、大君やお后様に代わって歌を  
作れるようになりたいんだって。  
花荻 宮廷歌人にだって？  
楓 あの顔で？  
菊香 歌は顔で作らないもの。心で作るのよ。  
「足引きの山鳥の尾のしだり尾の長々し  
夜を一人かも寝む」  
八重葎 何、それ。  
菊香 男の独り寝の寂しさを歌った、あの人  
の歌よ。  
浜木綿 あの御面相じゃ、共に寝てくれる女

がないのは当たりまえさ。

小海 私もそう思う。

菊香 でも、心は優しい。

花荻 なら、あなたが一緒に寝てやることだ

ね。

菊香 そうなってくれたら、嬉しいけど。

八重葎 そんなこと、本当に考えてるの？

出雲 信じられねえ。

小海 私も、そう思う。

楓 言っておくけど、あの男は宮廷歌人に

はなれないわよ。せいぜいが、草壁様

の舍人止まりよ。

花荻 あ。草壁様で思い出した。大名児よ。

早く見つけて連れ帰らないと、草壁様

のご機嫌が・・・。（浜木綿、楓に）

貴方たちは、あつちを探して頂戴。後

は私と一緒に向う。

宮女 たちはい。

花荻 くれぐれも岩場で足を取られないよう

にね。この吉野川の流れに一度嵌ったら、

命を落とすからね。

宮女たちはい。

花荻さ、行こう。

菊香一人を残して、去る。

菊香 あの人、また皇子様に叱られるのかし

ら。可哀想だわ。

花荻 (戻って来て) 何やってるの。

菊香 はい。

二人、去る。水の音。鳶の声。ややあ  
つて、草壁皇子と人麻呂がやって来る。

人麻呂 大名児さくん。

草壁 大名児オ。大名児オ。

人麻呂 どこへ行っちゃったんだろう。

草壁 見張ってると言っただろう。また歌を

案じていたな。

人麻呂 上手い表現が生まれそうだったんで

すよ。

草壁 猿が歌など詠むな。

人麻呂 お言葉ですが、私は猿ではありません。柿本人麻呂です。人間です。

草壁 その顔でか。生まれた時、余程猿に似ていたのだな。それで親は間違われないうように人麻呂なんて名をつけたんだ。

人麻呂 (頬を膨らませる)。

草壁 ははは、膨れるとなおさら猿にそっくりだ。いや、そんなことより大名児だ。猿。お前はそっちだ。俺はこっちを探す。

人麻呂 ですから私は猿じゃないって。

草壁 つべこべぬかすな。俺を誰だと思う、

日嗣皇子 (ひつぎのみこ) 草壁だぞ。ワッ！ (頭に手をやる)。

人麻呂 どうなさいました。

草壁 鳶の奴、糞をひっかけやがった。(臭いを嗅ぐ)ゲ。

人麻呂 これがほんとのクサカツペの皇子。

草壁 何。何。

草壁は、人麻呂を追い回す。人麻呂は、  
からかうように逃げ回る。

人麻呂 向こうを探して来ます。（素早く  
去る）。

草壁 糞。主人を馬鹿にしくさって・・。  
（川の流れて糞を取り除こうとして、小  
舟に気付く）あれは・・。間違いない。  
あそこに隠れている。大名児。大名児。  
（舟に飛び乗るが、すぐに弾き飛ばされ  
る）痛てて。だ、誰だ。

大津皇子が舟より現れる。大津は、若  
き美丈夫。

大津 昼寝の邪魔をするのは誰だ。あれ、兄  
君じゃありませんか。

草壁 お、大津か！  
大津 どうしました？

草壁 生きていてみる。后とお前の母親は姉  
大津 母の無い身には贅沢に聞こえますが。  
うな。  
母親ってのは、どうしてああ煩いんだろ  
草壁 日嗣皇子には、息抜きも必要だ。な、  
すよ。  
大津 また女ですか。叔母君が憂いておりま  
姫だ。すこぶるの美人だ。  
だ。そうだ。女を見かけなかつたか。舞  
草壁 あれをするな、これをするなばかり  
大津 日嗣皇子は大変ですか。  
草壁 気楽だな、三男坊は。  
いた釣り糸を見せる）  
大津 釣りをしながら詩など案じておりました  
草壁 で、こんなところで何をしておる。  
した。  
たかと思ひまして、投げつけてしまいま  
大津 あはは、これは失礼。一瞬賊に襲われ  
草壁 どうしましたかはないだろう。痛てて。

妹同士だ。口煩いこと請け合いだぞ。い

や、そんなことより女だ。女。

大津 そういえば、先ほど向こうのほうに走

って行く足音が・・・。

草壁 有難う。(行きかけて)このことは后

には内緒だぞ。

大津 はい。はい。(見送って、頭を下げる)

兄君 御免なさい。

舟から大名児が現れる

大名児 人の言うことをすぐ信じちゃうんだ。

あれで、次の大王が務まるのかねえ。

大津 心真っ直ぐなところが草壁皇子の好い

ところだ。

大名児 単純ッてことだろ。ま、好いや。舟

に戻ろうか(手を取る)

大津 うん？

中央の高台の上に黒衣皇子が現れる。

彼が見えるのは大津だけ。

黒衣 鈍いな。助けて貰った札に身を任そう  
といふんじゃねえか。

大津 抱かれるというのか。

大名児 男たちは私を抱くと、皆夢中になる  
ようだよ。だが断っておくけど、札は一度  
切りだよ。

黒衣 見れば見るほど好い肉置（ししおき）  
だ。俺もご相伴にあずかりたい。

大津 何を黄泉（よみ）の国の住人が。

大名児 黄泉の国の住人？

大津 お前にも見えないか。実はそこに悪霊  
がいる。

大名児 え。

黒衣 悪霊とは何だ。俺はお前の味方だぞ。

大津 お前を抱くと、そいつが覗き見する。

どうだ、それでも好いか。

大名児 気味が悪い。

大津 あはははは。そうだろう。だったら札

はいらん。

大名児 誘いを断るのか。こんな男初めてだ。  
黒衣 もったいなえなア、もう。

下手舞台奥で「皇子。大津皇子」と呼ぶ声。ややあつて、大津の臣真鳥（まどり）が走って来る。大名児は、岩陰に身を隠す

大津 真鳥ではないか。いつ伊勢から戻った。

真鳥 浄御原（きよみはら）の都につきます

と、大王のお伴をして吉野だとのこと。その足で駆けつけて参りました。

大津 姉上は息災か？

真鳥 はい。伊勢斎宮（さいいぐう）として恙無くお暮らしでございます。これを（と木簡を出す）。

大津 「わが背子（せこ）を大和へ遣るとさ夜ふけて 暁露（あかときつゆ）にわが立ち濡れし」

真鳥

皇子が伊勢より御戻りになつた時に詠

まれたそうです。おこづけもございま

す。  
辺りが暗くなり、上手の台の上に大津  
の姉大来皇女（おおくのひめみこ）が浮

かび出る。

大来

大津。恙なく暮らしていますか。貴方

が私を伊勢に残して去ってしまつた夜、  
私は宮の庭に出て、とうとう泣き明かし  
てしまいました。ふと気づくと、辺り一  
面の草草が露に濡れているではありませ  
んか。あれは、夜露なのか。それとも私  
の涙だったのか。その露が、登り染めた  
日輪の光を受けてキラキラと輝いている  
光景と言つたら・・・。私は、しばしそ  
の場に立ち尽くしてしまいました。その  
時に出来たのが、真鳥に託したその歌で  
す。貴方の作る漢詩程ではないかも知れ

黒衣

大来皇女か。お前の、たった一人の姉

道すがら、泣けて泣けて仕方なかったよ。

大津

伊勢齋宮として一人残され、心細かつ

大来が消え、辺りが明るくなる。

れど。

えるのかしら。早く会えると好いだけ

て孝養を尽くして下さい。今度は何時会

らね。大和にいられない私の分んも含め

親代わりになって育ててくれた人ですか

それと叔母君を大切に。私たち姉弟を母

君の仰せに従い、万事遺漏のないように。

恙なく祭事をこなしています。何事も父

でも、今は大丈夫。伊勢の大神に仕えて、

明日香の地が恋しくて恋しくて・・・。

しの間あのたたなずく青垣山に囲まれた

います。正直ついでに言うかね、私、少

ませんが、私の心が正直に出ていると思



大津 煩い。

真鳥 何か申してますか？

大津 気にするな。どれ、引き上げよう。

真鳥 その前にお許しを。あれでございませす。

大津の妻山辺皇女（やまべのひめみこ）

、その乳母萩野、渡来僧行心（こうじん）

、老臣真木備（まきび）が来る

大津 山辺じゃないか！

山辺 萩野や真鳥をお叱りにならないでね。

我儘を言ったのは、私の方なのですから。

萩野 申し訳ございません。何度もお止め申

したのですが・・・。

真木 備無分別も甚だしい。山辺様は生来お

身体がお弱くていらっしやるのに、何た

ることじゃ。

真鳥 ですから、興（こし）も用意し、万

に備え行心様にも御足労願ったと言っ

るじゃないですか。くどすぎますよ、伯

父御は。真木備大体年かさのお前がついておりながら何というさまじゃ。儂の世話より河辺様の世話を専一にせよと申して来た意味が分からんのか。例え河辺様が行きたいと仰つても、お体を思つてお留めするの、その方の役目ではないか。萩野それは、そうでございましょうが。真鳥伯母御に罪はありませんよ。大津皇子と離れ離れになつて、皇女は気鬱の御様子。このままにいるよりはと、行心様のお勧めもあつて。・・。行心左様。拙僧がお勧め致しました。真鳥そら、御覧なさい。真木備何を若造が。どうも近頃の若造どもは、口ばかりが達者で遺憾。それに何かという年寄りを蔑（ないがしろ）にする。よく聞けよ、そもそもあの壬申の乱の時に大王を報じ奉り、この大和の国に

安寧を齎（もたら）したのは、われら世  
代の者じゃ。我らがあつたればこそ、今  
日の平穩がある。平穩があればこそ、お  
前たち若造がこうして都を離れて吉野の  
離宮にも遊びに来れるという訳じゃ。少  
しは年寄りを敬わんか。  
真鳥 はい、はい。耳にタコですよ。その話  
は。  
大津 あは、ははは。また伯父甥の争いか。  
河辺も無事に着いたことだ、爺イ、許し  
てやれ。萩野、大儀であつた。行心様に  
はご足労をおかけ致しました。  
行心 此処が大王様挙兵の所縁（ゆかり）の  
地でございますか。空は青く澄み、水は  
鮮烈を極め、峨々としてそそり切り立つ  
巖は見る者の心をひきしめますな。  
大津 吉野は、疲れた魂を蘇生させるには、  
もつてこいの地だと大王はおっしゃって  
います。それで度々いらっしゃるのです。  
行心 これなれば、山辺様のお身体にも宜し

いかもしれません。新鮮な大気に包まれ  
る時、人の心と身体もまた新しく甦るも  
のです。黒衣 糞。坊主は苦手だ。何だかんだと加持  
祈禱（かじきとう）をする。どれ、消え  
るとするか。（姿を消す）。

山辺 皇子。そぞろ歩きがしとうございます。  
大津 疲れはせぬか。  
山辺 皇子とご一緒なら、山辺は疲れませぬ。  
萩野 まア、先ほどまで、疲れた疲れたと言  
っておいでしたのは、どなた様でござ  
いましょう。

河辺 知りません。萩野の意地悪。  
大津 滝の方へでも行ってみるか。滝の音に  
驚くなよ。

山辺 しつかりと皇子にしがみついております  
すから。

萩野 まア、まア、仲のお宜しいこと。  
河辺 皇子。萩野を叱ってやって下さいまし。

さつきから、河辺をからかってばかりお

一同　　（ドツと笑う）  
ります。（軽く萩野を睨む）

廷臣鹿島（かじま）、波多田を先頭に、  
国麻呂、海麿が両端から草壁の腕を取っ  
てやって来る。後から津守連が続く。

草壁　　痛い。痛い。痛いではないか。もつと  
手をゆるめぬか。わしは日嗣皇子だぞ。  
乱暴は許さんぞ。

国麻呂　　どう致しましたよう。  
鹿島　　さて。（津守を見る）。

津守連　　緩めれば、すぐにお逃げなさるだろ  
う。そのままで行け。

鹿島　　では、そういうことで。

海麿　　皇子。失礼致します。

草壁　　馬鹿。馬鹿、馬鹿。前よりきつく締め  
付ける奴があるか。痛て、痛いよ。

大津　　兄君。どうなされました。  
草壁　　は、ははは。女を捕まえるつもりが、

此奴らに捕まっちゃった。

真木備 津守連。日嗣皇子様にそのような扱  
い、無礼であらう。

津守連 これは、真木備様。どのようにして  
でもお連れ申せとお后様のご命令でござ  
います。少々のお后様のご命令でござ

急ぎますので、失礼致します。

草壁 やれやれ、またお叱言かよ。たまんね

えなあ、まったく。

鹿島 参れ。

国麻呂・海麿 はッ。

草壁 たちは去る。

真木備 二言目には、お后様、お后様じゃ。

津守連 奴、今来の分際で付け上がりおつ  
て。

羽鳥 それにしても、何とお軽い日嗣皇子だ。

あの方が次の大王だと思おうと、心が暗く  
なる。

真木備 お母君がご存命であれば、大津皇子、  
貴方様が間違ひなく日嗣皇子。それを思  
うと、爺は残念でなりません。  
行心 大津様は竜顔（りょうがん）の相をお  
待ちでございます。百官を統率し、必ず  
や万民を慈しむ評判高き大王になられる  
こと受けあいでもございますのに。  
大津 あはははは。好きな時に魚を釣り、好  
きな時に詩を作る。こんな結構な身分が  
またとあるものか。俺は今の境遇に満足  
している。山辺。案内しよう。  
山辺 皇子。（手を差し出す）。  
大津 手を引けとか。よし、よし。さ、行く  
ぞ。  
大津 は山辺の手を取って、去る。  
真木備 おお、おお、お仲の睦ましいことじ  
ゃ。これでお子様でもあればのう。  
萩野 まずはお体がご回復なされること。そ



萩野 貴方も真鳥ももうお止めなさい。ほれ、

お二人があんなに遠く。

行心 は、ははは。我々も急ぎ追い駆けまし

よう。(共に去る)。

鳶の声。水の音。中央の台の上に大名

児が現れる

大名児 ふく。噂に聞く大津皇子っていう

のがあの男か。気に入らないねえ。私の

方を断つて、皇女(ひめみこ)様とお手

々繋いで散歩かい。畜生、あんな皇女

さんより私の方がよっぽど好い女だって

のがわからないのかい。

黒衣が現れる

黒衣 女。そんなにカツカするなよ。熱を冷

ませよ。(ふつと息を吹きかける)

大名児 何だい、この生ぬるい風は・・・。

(首に手を当てゾツとする)。

### 第三場

吉野の離宮。中央の台が割れると、玉座が現れる。黒衣が現れ、玉座の背を撫でる。

黒衣　これだ。この玉座に俺は座りたかったのだ。糞、もう一步のところだったのに。

て来る。宮女たちが、宴会の準備のためにやっ

浜木綿　そりゃ、誰が何と言おうと私の好みは大津皇子。優しくって、明るくって、遅しくて。

小海　私も、そう思うわ。  
楓　その上物知りで、漢詩も作るんですつて。

八重葎 漢詩？

楓 唐（もろこし）の国の詩のことよ。作

るには、何でも決まりごとがたくさんあ  
るんだって。

浜木綿 貴方の好きな人が作る長歌や短歌とは  
比べ物にならないくらい難しらしい。

菊香 私、難しいのは苦手なもの。あの人の  
歌は、心にスーッと入ってくるわ。そこ

が好き。

出雲 おや、おや。

楓 御馳走様。

花荻がやって来る。

花荻 何話に夢中になってるんだい。準備は

出来たのかい。仕事の手は休めないの。  
これからこの吉野の離宮での最後の宴な

んだからね。

宮女 たちはい。

花荻 それにこちらの準備が済んだら、もう

一度稽古するからね。  
宮女たちはしい。(去ろうとする)。  
花荻 ちよつと待った。やはり気にかかるね。  
何話してたのさ？  
浜木 綿もし妃になるのだったら、皇子様たちの中で、誰が一番好いかってことですよ。私は、勿論大津皇子。  
小海 私も、そう思う。  
楓 私も。  
花荻 (菊香に) 貴方は、例の歌詠みでしょ。  
皇子様なんて眼中にないもんね。  
菊香 私は身の程を心得てるだけ。  
花荻 で、あなたは？  
八重葎 大津皇子って言いたいけど、競争敵しそうだから、忍壁皇子。  
花荻 川島皇子同様、先の大王天智様の皇子ね。でも、大分年下じゃない。  
八重葎 知らないんですか。近頃年の差婚つて、流行ってるんですよ。  
菊香 出雲さんは？

出雲 男に興味ないから。

一同 えッ。女に興味！

出雲 そ、そんなんじゃないよ。男って面倒

くさそうだから。

小海 私も、そう思う。

出雲 ちよつと、あんた。「私も、そう思う」

としか言えないのかい。まるで、考えつ

てものがないんだから。

小海 私も、そう思う。あッ！

一同 バーカ。

浜木 綿 ね、ね。それで花荻さんは？

花荻 いるにはいるけど、ま、言ってもねえ

・・。

楓 ずるい。ずるい。聞くだけ聞いて置い

て・・。

八重葎 私、知ってる。

宮女たち (口々に) 誰、誰。(八重葎を取

り囲む)

八重葎 (そつと告げる)。

宮女たち ええ！

花荻 何よ、その非難めいた目つきは。  
楓 だって曰くつきの皇子様じゃないです  
か。  
浜木綿 宮中一の飲んだくれ。  
花荻 お黙り。人には好みて言うものがあ  
るんだよ。他人がとやかく言うもんじゃ  
ないよ。  
小海 私も、そう思う。  
一同 また、また。  
菊香 確かに花荻さんの言う通りかも。  
八重葎 何利いた風なこと言ってるのよ。  
花荻 さ、無駄話に時を割いてる暇はないよ。  
お稽古、お稽古。  
宮女たち はしい。(共々に去る)。  
黒衣 昔も今も若い女たちが集まると男の話  
でかしましたしい。大津はやはり人気者らし  
いな。だが、草壁と言う奴がいないのは、  
どうしたわけだ。  
后と津守連がやって来る。

津守連 例の星がまた一段と輝きを増し始め  
 ました。それに引き換えもう一方の星は  
 ・・・。  
 后 申すでない。不吉が胸を過ります。大  
 王のお力をお借りしましょう。  
 黒衣 津守連奴、后の不安を搔き立てるのに  
 必死だな。  
 大王、廷臣一、二を従えて来る  
 大王。此処にか。  
 黒衣 天武（てんむ）か。ほほう、額田女王  
 （ぬかだのおおきみ）と浮名を流してい  
 たころと違って、大分恰幅（かっぷく）  
 が好くなつたな。  
 后 津守連、草壁をこれへ。  
 津守連 はッ。（去る）。  
 后 大王。貴方の国造りはこの吉野から始  
 まりまりました。明日此処を離れるに

当って、是非お願いしたいことがござ

います。

大王 何なりと言うが好い。近江京脱出の折、

たった一人この吉野まで行を共にしてく

れたお前の願いだ。否やは申さぬつもり

だ。

后 もう一度この土地で皇子達に誓わせて

下さい。大王の次を襲うのは草壁皇子、

各皇子はその草壁に協力するようにと。

大王 幸い今宵は吉野最後の酒宴がある。皇

子達も追々集まって来よう。そこで申し

付けよう。

后 有難うございます。

多波田、国麻呂、海麿、鹿島が来る。

多波田 今宵で吉野の離宮とお別れか。

海麿 早く浄御原の都へ帰りたいたいものだ。

鹿島 そんなに帰りたいたいか。

国麻呂 嫁を娶ったばかりですから。

海麿 いや、別にそういう訳では・・・。

鹿島 照れるな。照れるな。

国麻呂 儂は、帰りたくない。帰れば、あれ

をやれ、これをやれと、追い使われる。

鹿島 鬼嫁だからな。

多波田 こんな顔をした。(醜い顔)

国麻呂 ああ、その顔を思い出しただけで、

身震いがする。

大王 は、はははは。国麻呂よ、苦勞してお

るようだの。

鹿島 これは、大王。

三人 失礼致しました。

三人は、礼をして下手に控える。大津、

川島、忍壁がやって来る。

川島 新羅(しらぎ)では兵を集め出しまし

た。

忍壁 筑紫(つくし)の防人(さきもり)を

やはり増やすべきでしょう。

大津 さア、それはどうかな。  
大王 皇子達よ、何の議論だ。  
川島 これは大王。つい話に夢中になりました  
て・・・。(礼をする)

大王 何を論じておったのじゃ。  
川島 今国家として何を優先すべきかを論じて  
ておりました。

忍壁 新羅はこのところ増兵に継ぐ増兵です。  
これに対応するのが焦眉の急というのが  
川島 皇子と私の考えです。

大王 大津は違うのか。  
大津 確かに新羅は増兵策を打ち出しています  
す。しかし、それが我が国侵攻の為とは  
思えないのです。

川島 新羅は白村江(はくすきのえ)で我が  
国の軍を破り、その後、援軍であった唐  
とも戦って勝利しています。時の勢いに

大津 乗じて攻めて来ることもあるでしょう。

大津 二度の外国（とつくに）との戦いで彼

の国では、人々は疲弊し、国中に不満が

渦巻いているそうです。増兵はそれを抑

える為のものだとは考えられませんか。

第一今新羅が我が国に兵を向けたら、唐

はどう動きます？

忍壁 唐？そうか、新羅の背後から雪辱戦を

挑みますね。

大津 では、新羅が唐に兵を向けたら？

川島 我が国が後を襲って、任那府（みまな

ふ）の回復が出来るかもしれない。

大津 だとしたら、新羅は動けない。新羅王

は英邁な方だと聞きます。敢えて無謀に

走るでしょうか。

黒衣 成程。さすが俺が見込んだだけのこと

はある。好い読みをしてるぜ。

大王 それでは大津は何を優先せよというの

かな。

大津 外国との交流ですかね。

大王 ほほう、軍事ではなく、交流か。

草壁が、鹿島と共にやって来る。遅れて真木備、真鳥。反対側から、音檜（おとかし）、磯成（いそなり）が来る。二人は廷臣。真木備たちと一団をつくる。

草壁 何だ、何だ。小難しそうな顔を並べて。

吉野最後の酒宴だぞ。パッとやろう。パッと。そうだ。高市皇子に何か趣向があるそうだ。楽しみに待っているとの言伝だった。

大王 よいところへ来た。草壁も加わるが好い。今国家として最優先すべきことは何かを論じていたところだ。

草壁 ゲ。まずいとこへ来ちゃったな。后 草壁。よい折です。貴方も日ごろ考え

天武 大津は外国との交流こそが今この国に  
は大事だと申ししたところだ。草壁お前だ

草壁 　　「　　ったら、何が重要だと考える。」

草壁 　　「　　そんな急に言われてもなア・・・。」

大津 　　「　　津、先にお前から言え。（目顔で促す）」

大津 　　「　　では、私は新羅を牽制する為にも唐と

草壁 　　「　　の関係修復が急務かと考えます。」

草壁 　　「　　そうか。いや、実は俺もそう思ってい

黒衣 　　「　　たのだよ。」

黒衣 　　「　　調子悪い奴だな、此奴。」

磯成 　　「　　（小声で）始まりましたね、何時もの

大津様頼みが。」

真木備 　　「　　何の考えもお持ちにならない皇子様

じやからの。」

大津 　　「　　その上でこれまで以上にあの国から学

ぶべきものを学ぶ。制度、組織、軍事、

外交等もろもろです。」

草壁 　　「　　俺の考えとそっくりだ。」

后 　　「　　まア、何時の間に貴方はそのようなこ

とまで考えるように・・・。」

とそ

日嗣皇子。私は安心致しました。」

黒衣 　　「　　后ともあろう者が、親馬鹿丸出しじゃ

ねえか。  
大王では、唐の国から万物を学ぶこととし  
て、まずは何かから学べばよいかの。草壁  
よ。  
草壁はア。  
音檉またぞろ雲行きが怪しくなってきたし  
たよ。  
草壁いや、それは・・・。（再び目顔で、  
大津に助けを求めろ）  
大津律の導入はどうでしょう。我が国では  
すでに租庸調を初めとする令の制度は確  
立されています。しかし、全国一律の罰  
則の制度というものがありません。  
草壁そうだな。びしびしと民百姓を取り締  
まるには法の整備が必要だな。  
大津いや、むしろ逆の意味から私は必要だ  
と申し上げているのです。  
川島逆の意味？  
大津現在刑の執行は諸国の豪族達の恣意に  
任されております。同じ罪を犯しても、

豪族の気分次第で、或る者は鞭打ちの刑  
で済み、或る者は死罪になつていと聞  
き及びます。ここに全国一律の法があれ  
ば、民百姓は豪族の気分のままに罰せら  
れることもなく、何を犯せば罪となるか  
明確に把握出来ることとなるでしょう。  
そうなれば、罰を恐れて、重罪を犯す者  
は必ずや少なくなるに違いありません。  
国家一律の法が人々の不安を払い、心の  
安寧（あんねい）を齎（もたら）すと考  
えているのですが、どうでしょう。  
多波田成程、言われてみれば・・・。  
国麻呂やはり大津皇子は、目の付け所が違  
う。  
鹿島　　またも草壁様は大津様に一步先んじら  
れてしまったか。  
真木備（拍手して）これでこそわしがお育  
て申した皇子様じゃ。（一同を見回して）  
同じ仕えるなら、このような皇子様にお  
仕えしたいものじゃのう。そうは思わん

か、皆の衆。うは、ははは。  
音 檜 真木備様の仰る通り。  
磯 成 我らの大津様は、聡明でいらっしやい  
ます。  
大 王 大津の考え、傾聴に値するな。  
大 津 よい折です。大王、諸々の制度を学ぶ  
ために是非私を唐の国へ渡らせてはくれ  
ませんか  
后 貴方自身が渡るといいますか。  
草 とか何とか言いながら、お前は詩の勉  
強がしたいんだろう。  
大 津 あは、ははは。ま、それもありますが大  
ね。  
草 壁 調子好いんだから、この、この。  
黒 衣 調子の好いのはお前の方じゃねえかよ。  
后 は津守連を隅へと誘う。  
后 案ずるより産むが易しとはこのことで  
すね。大津が唐土に渡れば、その間に草

壁の地位を確固たるものにすることが  
できましよう。津守連さて、そうなりますかどうか。  
大王いや、それはなるまいよ。我が朝廷は、  
生まれて間もない。不備不具合が至る所  
にある。大津には草壁の傍にいて、諸々  
の手助けをして貰わなければならぬ。外  
国へ出すなど思いもよらぬことじゃ。  
津守連大王は、大津様に絶大な信任をお寄  
せです。信頼に満ち溢れたあのご尊顔を  
ご覧なさいませ。大津高市皇子（たけちのみこ）がいらっし  
やいます。壬申の乱一番の功労者がお手  
助けを……。大王武人としては秀でているが、国家の組  
織、運営となると話は別じゃ。黒衣さすが天武、よく皇子たちの特徴を掴  
んでおるわ。后さういうことなら……。大王に申し  
上げます。何卒先程のお願いを。

大王　　そうであつたな。皇子たちよ、此処吉野は我が朝廷の発祥の地だ。此処で改めて誓つてはくれまいか。儂の後を継ぐ者は草壁。それぞれは彼を支えて、如何なる難局も乗り切ることを。

皇子達　　ははッ。

后　　草壁、中央にお立ちなさい。

草壁　　照れるなア。

后　　皇子達は、周りに集まって下さい。

津守連　　お后様。まだ高市皇子が・・・。

后　　誰か高市皇子を。

廷臣一　　はッ。

　　廷臣一が迎えに行こうとすると、高なる銅鑼の音。仮面を着け、銅鑼を打つ人麻呂を先頭に、着飾った宮女たち、続いて高市皇子がやって来る。高市は酩酊状態。花荻が支えている。

高市　　おお、いずれも揃つておるな。よし、

よし。さア、旨酒を飲み、山海の珍味を  
味合おう。ささ、女たちよ、先程習い覚  
えた舞と歌とを披露するのじゃ。それ、  
花荻。  
花荻はい。（合図を送る）。

宮女たちは、場に付こうとする

后 高市皇子。その前に誓いを立てて頂き

ましよう。

高市 誓い？

后 草壁を柱として、皇子達それぞれが支  
え合うとの誓いです。

高市 何を下らんことを・・・。

后 何ですって。

高市 そうではありませんか。後の父君天智

大王は、皇太弟であった現在の大王に何  
とお誓いなされました。行く行くは大王  
の位を譲るとおっしゃったはず。ところ  
がどうです。子の太友皇子が成人すると、

手の平を返すように豹変なすった。これが、そもそもその壬申の乱の発端です。誓いなど何の役にも立ちやアしない。ウイ。く。

后　　（吹きかけられて、思わず顔を背ける）

黒衣　　痛いところを突かれたな、后。

大王　　これ、高市。酒の上とはいえ言葉が過ぎるぞ。后のたつての望みなのだ。お前も誓え。

高市　　はいはい。大王のご命令とあれば、おつとと（よろける）。

大津　　（支えて）高市皇子。深酒は身体によくありませんよ。

高市　　大津か。あははは、お前はいつも優しいな。おい、草壁。誓ってやるから、お前もしっかりしろ。（息を吹きかける）

草壁　　ワァ、臭え。

志貴皇子が、やって来る。志貴族は少年。

志貴 何か楽しいことがあると聞いたのです  
が。  
大王 志貴皇子か。丁度良い。お前も誓いに  
加わるがよい。  
志貴 はい。  
大王 それでは、先に申したこと、違えまい  
ぞ。  
大津 ともに大王のご命令の通り、草壁皇子  
を相扶け、逆らわぬことを誓います。  
川島 私は先の大王天智の子供。それにも関  
わらず、この朝廷に仕えることを許して  
下さった大王の広いお心に報いるために  
も、草壁皇子に協力致します。  
忍壁 私も同じ思いに代わりありません。  
志貴 私も。  
皇子達 (草壁を中心に、片膝立ての臣下の  
礼を取る)。  
大王 (皇子達を覆うように手を広げて) 皆  
我が子と知っているぞ。誓いを忘れまい  
ぞ。

皇子達（頭を下げる）。

大王 后、これでよいな。

后 有難うございます。

大王 それでは酒宴だ。吉野の最後の夜を楽

しもうぞ。

高市 お許しが出了。舞姫たちよ、歌え、舞

え。

高市 は、思わずよろける。花荻が支える。

花荻 高市皇子。

高市 何時も済まん。お前は舞に加わることが

好い。おい、誰か酒を持って来い。

と、荘重な音楽。宮女たちが舞おうとする

と、人麻呂が激しく銅鑼を鳴らす

高市 こら、何をする。

人麻呂 約束が違えます。歌の作者は私だと

皆様に御紹介戴くお約束でした。（仮面

を取る。)

草壁 猿じゃないか。

高市 分かった。分かった。歌を作ったのは、

この猿殿じゃ。

人麻呂 高市皇子。草壁皇子。私は猿ではな

くて、人麻呂です。

高市 どっちでもいいじゃないか。毛が三本

多いか少ないかの違いだ。それ、始めろ。

始めろ。

改めて荘重な音楽。舞姫達は歌いか

つ舞う。

宮女たちへやすみししわが大君神なが

ら神さびせすと吉野川たぎつ河内

に高殿を高知りまして

大名児がやって来て、途中から舞に加

わり、かつ歌う。

大 名 児 へ 登 り た ち 国 見 を せ せ ば た た な  
 は る 青 垣 山 山 神 の 奉 る 御 調 と 春  
 へ は 花 か ざ し 持 ち  
 宮 女 ・ 大 名 児 へ 秋 立 て ば 黄 葉 か ざ せ り  
 行 き 沿 う 川 の 神 も 大 御 食 に 仕 え 奉  
 る と 上 つ 瀬 に 鶺 鴒 川 を た ち 下 つ 瀬 に  
 小 網 さ し 渡 す 山 川 も 依 り て 仕 ふ る  
 神 の 御 世 か も  
 草 壁 は 、 喜 ん で 舞 に 加 わ ろ う と す る が 、  
 大 名 児 は 相 手 に し な い 。 大 津 を 無 理 や り 舞  
 に 引 き 入 れ 、 や が て 二 人 し て 、 華 麗 に 舞 う 。  
 津 守 連 御 覧 な さ り ま せ 、 お 后 様 。 宮 廷 中 の  
 目 と う い う 目 が 、 す べ て 大 津 皇 子 に 注 が  
 れ て お り ま す 。  
 黒 衣  
 ・ ・ ・ 。  
 そ れ に 引 き 換 え 草 壁 の あ の 体 た ら く は

後の顔にはつきりとば不安が過る

第二幕

第一場

暗闇の中に荻野が浮かぶ。

荻野

それはそれは、優雅な舞だったそう、  
差す手引く手の艶やかだったことは、今  
でも語り伝えられているほどでございま  
す。おります。大津皇子様は何処で舞な  
ど覚えられたのか。幼少の自分より御側  
にお仕えした私にも分かりませぬ。或い  
は、お誘いになった大名児さんの身振り  
手振りの巧みさに、自然と反応なすった  
のかも知れませぬ。何しろ大津皇子は各  
方面に類まれな技量をお持ちの方でござ  
いましたから。一方の草壁皇子と言え、  
お分かりでございませぬ。次の大王の

津守連 草壁様は遊びたい盛りなので。い  
のだけれど・・・。  
の大王、二人の皇子に血筋の優劣はない  
と同じ先の大智の娘、父は同じ現在  
后 それに引き換え草壁は・・・。私は姉  
館詣でをなすっているそうです。  
津守連 大津皇子を頼もしく思う方々が、お  
ったことか。  
后 隣の星が何とみすばらしくなつてしま  
津守連 また一段とあの星が燃えさかる。  
浮かぶ。満天の星空。  
萩野が消えると、望楼に后と津守連が  
おいででした。  
それが唯一の悩みの種。日々心を砕いて  
事実でございます。お后様にとつては、  
にも即位を危ぶむ方々が多数あつたのも  
い所がおありのお方で・・・。廷臣の中  
位を襲うお方としては、少々もの足りな

ずれ英邁な大王になられることでしょう。

ただ、その前に大津様の存在が大きくなり過ぎますと……。

后 吉野での誓いは当てになりませんか。

津守連 高市皇子が申された通りと存じます。

后 大津に限っては思うものの……。

嗚呼あの星の光がまた一段と暗くなった。

津守連 大王にはこのところお臥せりがち。

何かあつてからでは間に合いません。ご

用心が肝要かと。

后 そうかも……、知れませぬへじつ

と天を仰ぐ。

## 第二場

磐余の池。上手の台に大津、指に釣り

糸をつけ、じつとしている。台の前は池。

中央の台の上を歩きつ、戻りつしながら、

黒衣が何やらしゃべっている。

黒衣 好いか、謀反の仲間集めには、細心の注意が必要だ。集めた仲間は、何度も吟味する。俺はそれをやらずに失敗した。まさか謀反を勧めた本人が、向こうの参謀だったとは気付かなかった。おい、聞いているのか。

大津 (両耳より、葦の髄を取り出す) 何か言ったか？

黒衣 何か言ったかだと。何だ、それは。

大津 煩そうだったから、葦の髄で耳に栓をしておいた。

黒衣 謀反の為の要諦を聞いてなかったのか。

大津 せいぜい仲間選びには気を付けろ。その程度の事だろう。

黒衣 も一つ忘れていた。彼奴だけは是非仲間引き込め。

大津 高市皇子か。母親が外国の生まれで、長男ながら皇位継承の資格がない。心に不満を持つ奴ほど活躍するものだ、そう言いのだろう。

黒衣 何も彼も弁（わきま）えてやがる。や  
い、それでいて何故謀反を起こさない。  
大津 俺は今のままで満足なんだ。  
黒衣 信じられん。俺たち皇子と生まれた者  
は、必ず一度は王位を夢見るもんだ。  
大津 俺たち皇子だと。ということは、お前  
も皇子だということか？  
黒衣 あ。  
大津 凶星だな。  
黒衣 知るか。人の好意を無にしやがって。  
面白くない、俺は消える。  
大津 二度と現れるな。  
黒衣 馬鹿野郎！（怒って消える）  
大津 願ったり、叶ったりだ。（餌を付け替  
え、糸を池に戻す）  
がらやっつて来る  
人麻呂と菊香が、大名児の名を呼びな  
人麻呂 大名児さくん。大名児さくん。

菊香 大名児様ア。

大津 人麻呂じゃないか。

人麻呂 へ？あの、今何とおっしゃいました。

大津 人麻呂。確かお前の名前は……。

人麻呂 猿じゃない。おい、聞いたかい。確

菊香 人麻呂とお呼びだったよ。

人麻呂 こんな皇子様、初めてだ。

大津 え？

人麻呂 大津皇子、有難うございます。

菊香 この人、目上の人からは猿、猿って呼

ばれてるんです。それが、初めて人麻呂

って本名で呼ばれて感激してるんです。

大津 お前は？

人麻呂 菊香と申します。宮廷に仕えており

ます。私の作る歌が好きだと言って……

菊香 その、何と言いますか……。

大津 作者まで好きになっちゃったわけか。

人麻呂 さすが大津皇子様。お察しが早い。

菊香 恥ずかしい。(人麻呂の背に隠れる)

大津 成程、それで、今日は妹背揃って、大

名児の探索という訳か？

菊香 あら、妹背だなんて、どうしよう私・

・・。

人麻呂 あの人、すぐ逃げちゃうんですよね。

何時も歌作りに夢中になって、見張りを

疎かにしている私も悪いんですけど。

菊香 いえ、今日のは私が悪いんです。少し

でもこの人に歌を作る暇を拵えてあげよ

うと思つて、見張りの役をかって出たん

です、ついうとうと眠気がさして・・

・。ご免ね。草壁皇子様にまた叱られち

やうね。

大津 あは、はははは。兄君もこれまでにな

いご執心のようだな。

人麻呂 何しろ匂い立つような色香ですから。

菊香 女の私でもほれぼれします。

大津 兄上も女になどかまけずに、お前に歌

の一つも教われれば好いにな。

人麻呂 いけません。あのお方には、歌の才  
能と云うのがまるでございません。  
大津 そうか。  
人麻呂 いつぞや大名児様に歌を贈りたいか  
ら読み方を教えろと申されました。そこ  
で、五七五七七で、感動したところ「  
けり」や「かも」をつけると歌らしゅう  
なりますとお教えしたところ、そんなも  
のかと・・・。  
菊香 どんな歌を作った？  
人麻呂 「大名児に振られて石を蹴りにけり  
当たりて死ぬる池の鴨かも」。どうだ、「  
けり」と「かも」が二つずつ入っている  
と。  
大津 「けりけり、かもかも」とは傑作だ。  
三人 は、はは。は、ははは。  
人麻呂 教える意欲がなくなりました。  
大津 やはり兄君には無理か。それで、見張  
りを代わってもらって、お前は好い歌が  
作れたのか。出来たのなら、是非聞かせ

て貰いたいのだな。  
人麻呂 おい、聞いたかい。大津皇子が俺の  
歌を聞いて下さるとさ。  
菊香 好かったね。私も聞きたい。聞かせて  
頂戴。  
人麻呂 それでは、作りました歌を。えへん。  
「近江の海 夕波千鳥 汝が鳴けば 心  
大津 うむ。夕日を浴びて波間を群れ飛ぶ千  
鳥の姿が目に浮かぶようだな。夕波千鳥  
とは、上手い表現だ。  
人麻呂 お分かりいただけますか。最も腐心  
したところでございます。  
菊香 綺麗なことば。目を瞑ると、瞼の裏に  
その光景がはっきりと浮かんでくる。  
大津 近江の海か。よく姉上や草壁皇子と舟  
を浮かべて遊んだものだ。  
人麻呂 使いで行ってまいりましたが、近江  
の都はたいそうな寂れようでございまし  
た。

大津 復興はままならんか。

人麻呂 莊嚴を極めた宮殿楼閣は焼きつくさ

れ、無惨の一語につきまます。嫌ですね。

戦は。

菊香 私の兄たちは、近江方と吉野方に分か

れて戦い、それぞれ死んでしまいました。

大津 二度とあって欲しくないな。同じ血を

引くもの同士が殺し合う合戦など。

人麻呂 へ？

大津 うん？ どうかしたか。

人麻呂 口さがない者が申ししております。も

しかしたら、皇子様が次の大王を狙って

草壁皇子様と・・・。

菊香 その噂なら私も聞きいた。再び合戦が

起こるんじゃないかと、人々が疑心暗鬼

だとか。

大津 (カッと目を怒らし見)おのれ、貴様

ら。我が本心を見破ったか。

二人 ええ！

大津 どうしてくれよう。その頭二つ並べて

打ち首にしてくれん。

二人 ヒエ。どうかお許しを！（這い蹲る）

大津 あは、はははは。嘘だよ。俺も戦いは

大ッ嫌いだ。あは、はははは。

人麻呂 ええ。冗談なんですか。

菊香 皇子様もお人が悪い。

大津 許せ。許せ。だが、これだけは言っ

置くぞ。俺は兄君が好きだ。生涯かけ

ておれは兄君を補佐して行く心算だ。敵

対する気持ちなど微塵もない。お前たち

も兄君の為に一生懸命仕えてやってくれ。

この通りだ。（頭を下げる）

二人 勿体のうございませう。（平伏する）

大名児が来る。二人に気付き、陰に隠

れる。

人麻呂 大津皇子様、一つお願いがございま

す。唐の詩をよくお作りになさるとか、そ

れを一つお聞かせ願えませんか。

大津　　いつでも好い、館に訪ねて来い。お前

の歌をもっと知りたい。

人麻呂　有難うございます。

菊香　それでは、私たちは大名児様をお探し

に。

大津　大名児に会ったら、伝えてくれ。吉野

から戻って再び床についた河辺の、今日

は本復を祝う宴の日だ。出来たら彼女の

為に是非舞ってはくれぬかと。

人麻呂　畏まりました。（菊香と共に去る）

山辺と真鳥が来る

山辺　皇子、真木備と磯成様を除いて皆様が

お揃いです。

大津　早いな。

真鳥　高市皇子様が早く集まれと触れられた

そうですね。ご本人は、もう勝手にお始め

になつております。

大津　困ったお人だ。

山辺 お酒には目がない兄君でいらっしやい

ますもの。

大津 まったくその通りだ。あは、ははは。

音櫂 が息を切らしてやって来る

音櫂 大津皇子。西の寺院で暴動が出来致し

ました。

大津 何。

音櫂 兵士たちと人夫たちが入り乱れての乱

闘でございます。

真鳥 (素早く引き返す)

音櫂 すでに草壁様にはご出馬とか。

大津 原因は？

音櫂 それが、よくとは・・・。

川島、忍壁、行心達が来る

川島 真鳥から聞きました。由々しきことが

出来(しゅつ)たい)したと。

行心 このままには捨て置かれますまい。

大津 真鳥。馬の用意だ。

真鳥 (陰で) ただ今準備しております。

馬の嘶き。

大津 山辺。お前の為の宴だが、ことによつ

たら、延期せねばなるまい。

山辺 はい。すぐにおいで遊ばしませ。

大津 案内しろ。

音櫛 はい。

大津、音櫛は、去る。釣糸が残された

まま。

行心 私たちもお供致しましょう。

川島 勿論です。

行心 真木備様や磯成殿にもお知らせを。

忍壁 それは、私が。

川島 高市皇子はどうしましょう。

行心 呑んだくれて、すでに高敷の御様子。  
起こすには及びますまい。  
忍壁 では、西の寺院で。  
と 疾駆する蹄の音。萩野が来る。  
山辺を残して、一同は去る。馬の嘶き  
萩野 お元気になったとはいえ、病み上がり  
には外の風はいまだ毒でございますよ。  
どぞお館にお戻りを。  
河辺 吉野から戻って、少々体調の良いこと  
に油断してしまいました。再び病の床に  
つこうとは・・・。  
萩野 それも今日まで。行心様も館の内なら、  
気儘に歩いて、好いと仰せでした。  
河辺 萩野にも苦勞を掛けましたね。今日の  
祝宴が終わったら、真木備と連れ立って  
館に戻るとよい。真木備も久しぶりに妻  
の料理が食べたかろう。  
萩野 はて、またご酒を召し上がる度に、壬

申の乱の手柄話を聞かせられるかと思う  
と・・・。  
山辺「まア、萩野ったら。」  
二人「ほ、ほほほ。」  
山辺「それにしても、西の寺院のことが気が  
かりです。一体何が起こったというので  
しよう。」  
萩野「御心配遊ばしますな。大津皇子が出向  
かれたからは、必ずうまく収まるに違い  
山辺「そうですね。好いのですが・・・。」  
萩野「さ、参りましたよう。」  
山辺「萩野は去る。陰より大名児が現  
れる。」  
大名児「へんだ。誰がお前の為になぞ舞って  
なんかやるもんか。ああ、それにしても  
どうしちゃったんだろね、この私の心の  
波立ちは。そうだ。私も西の寺院に行っ

てみよう。(走って去る)。

### 第三場

西の寺院。下手に中央の台の一部。その上に作りかけの鐘楼。多くの人夫と兵士たちが、片や木材を、片や得物を持つて入り乱れている。鐘楼の上では黒衣が喚いている。

黒衣

それ、突くんだ。ぶん殴れ。丸太ン棒で官人どもの頭をかち割っちゃまえ。兵士も官人たちも何を躊躇している。刀で斬れ。槍で突かんか。

馬を駆って草壁。鹿島、その他の廷臣たちが追って来る。

鹿島

静まれ。静まれ。草壁皇子様のお出ましだぞ。日嗣皇子に無礼を働くな。控え

ろ。止めぬか。静まれ。

一同驚き、両手に分かれる。

草壁 責任者は誰だ。出て参れ。

男足 お前に。橘男足（たちばなおたり）と

申します。

草壁 発端は何だ。

男足 仕事を懈怠（けたい）する者三名を鞭

打ちに致しましたところ、一部煽動する

者がございました。・・。

草壁 よし。逆らう者は容赦するな。斬って

捨てる。

黒衣 時には好い事言うじゃねえか。あたり

一面血の海になるぞ。おお、ゾクゾクし

てきたぜ。

男足 斬れ。斬りまくれ。

兵士たち おお（刀を振りかざす）。

人夫達は、抗う。その渦の中で、草壁

は翻弄される。やがて新手の兵が加わっ  
て、一斉に斬りかかろうとするとき、大  
津が馬を駆って割って入る。続いて真鳥、  
川島。  
大津 斬るな。斬ってはならぬ。  
真鳥 控えろ。大津皇子様だぞ。控えろ。  
双方、その声に怯む。川島たちが双方  
を分ける中に、忍壁、真木備、磯成が駆  
けつける。  
忍壁 大津皇子。ただ今参着いたしました。  
真木備 そもそもその原因は？  
大津 兄君、御分かりでございますか？  
草壁 仕事を怠ける者を鞭打ったところ、煽  
動する者があってこのようになったとい  
うことだ。  
大津 で、この者達の言い分は？  
草壁 何？

大津 念には念を入れねばなりません。ど  
うだ、言い分のある者はいるか。  
川島 いたら、言え。このままでは、お前達  
は皆死罪だ。  
人夫 達（怯える）。  
人夫 一 お畏れながら、おらだちや、仕事な  
まげでなんていねえッす。べちのごど  
やらせようどすっから、でぎねえって、  
断っただけで・・・。  
人夫 二 男足様が、今夜この寺に使う木材を  
自分の館に運べって。  
男足 （慌てて）ば、馬鹿を申せ。  
人夫 一 いんや、今夜ばかりのこととねえッ  
す。昨日の晩げも、その前の晩げも・・・。  
男足 大津皇子に申し上げます。答えた者達  
は、とかく素行よろしからざる東戎ども  
でございます。何卒お聞き流しのほどを。  
人夫 二 皆知ってるごどだっぺ。だから、鞭  
打だれだ時、そりやながっぺって、皆が

騒ぎ出して……。

大津 官人の中にも事情が分かっている者が  
いよう。お前はどうかだ。

兵士一 それは……。

男足 (睨みつける)。

官人たち……。

大津 男足とか申したな。もちろん横流しな  
どはしておらぬな。

男足 断じてそのようなこと。

大津 (馬より降り) さて、困った。兄君、  
どういたしましたしょう。

草壁 う、うん……。

大津 昨日、一昨日と同じことをやらせたと  
申しておりますから、運んだ当人たちに  
その隠し場所に案内させてみては如何  
でございましょう。

草壁 いや、実は俺もそれを考えていたとこ  
ろだった。

黒衣 またまたいつもの手を使いやがって。

大津 そこにもものがあるかどうか。川島皇子。

忍壁皇子。御足労ながら……。

二人 心得ました。

大津 文句はないな、男足。

男足 そ、それは……。 (脱兎のごとく逃

げ出す)。

大津 兄君。ご命令を。

草壁 男足を捕まえろ。

兵士たち はッ。(男足を追いかける)。

人夫達の歓声が沸き起こる。

行心 大津様のお裁き、見事でございました。

真木備 うははは、この者たちの喜ぶことよ。

磯成 また一つ御老人の皇子様自慢の種が増

え ましたな。

黒衣 面白くもねえ。折角の楽しみが泡と消

え ちまった。文句の一つも言いてえが、

が 傍にいたんじゃないア。

大津 皆、よく聞け。全て草壁皇子のお裁き

が あったからこそだ。草壁皇子に感謝し

ろ。  
人夫達（平伏する）。  
音櫓 大津様らしい納めようですな。  
真木備 わははは、人の上に立つものは、こ  
うでなくてはのう。そうは思われませ  
ぬか、草壁皇子。  
草壁 ああ、俺は疲れたよ（どつかと座り込  
む）  
大津 しつかりなさい、兄君。真鳥、お前は  
俺の馬を引け。俺は兄君を送って行く。  
さ、参りましたよう。（草壁を馬に乗せ、  
その手綱を取る）  
人夫一 お有難うございました、大津皇子  
様。  
人夫二 お蔭で命拾いを致しました。  
大津は、馬を引いて去る。後に続く真  
木備たちや、人夫たち。後に黒衣一人。  
何処からともなく湧き起こる「大津、大  
津」の合唱。やがてその声が小さく薄

れて行くと、大名児が現れる。

大名児 あの鮮やかさ。あの爽やかさ。いけ  
ない。また私の胸がキュンと締め付けら  
れる。

黒衣 恋しちまったのかい、舞姫さんよ。恋  
の薬は、人の心を軽やかにもすれば、重  
くもする。はて、お前さんの恋はどっち  
なんだろうね。（ふつと息を吹きかける）

大名児 （へなへなとその場に崩折れる）。

#### 第四場

宮中。廷臣たちが激しく動き廻る。

多波田 聞いたか。聞いたか。

国麻呂 聞いたぞ。聞いたぞ。

鹿島 （苦り切って）西の寺院のあの騒動。

国麻呂 大津皇子の人氣がまたも鰻上りじ  
や。

海麿 それに引き替え草壁皇子様の評判は・

・  
・  
。

多波田 日嗣皇子を大津皇子にという声があ  
ちこちで立ち登る。

国麻呂 だが、その件は既に決まったことで  
あろう。

海麿 明日が知れぬのが政の世界だ。

多波田 ひよんなことからひよんなことに。

鹿島 皇位を廻ってやはりまた合戦が・・。

多波田 さて、どちらにっこう。

国麻呂 どちらにっこう。

鹿島 ええ、そんなこと決まっておるわ。我

らが使えは津守連様だ。

### 第五場

望楼。満天の星。后と津守連。

后 あの星の光が、あるか無きかになりま

した。

津守連 暴動以来あの方の人気はいや増すばかり。あの真っ赤に燃えるような星の輝きがそれを如実に物語っております。廷臣どもも動揺し始めました。后 それにつけても草壁のこの頃の所業、目に余るものがあります。を飲んでいる 上手の台に草壁と人麻呂が浮かぶ。酒 草壁 もっと注げ。人麻呂 いけません。お身体に障ります。草壁 こんな身体、腐るが好い。人麻呂 次の大王様がそんな事を言っはなりません。草壁 分かっているんだ。俺は無能だ、大王の器じゃない。人麻呂 お后様が悲しみます。草壁 後の期待が重すぎる。日嗣皇子なぞ大津に譲ってしまいたい。彼奴ならこの国

人麻呂 言ったら？

草壁 大名児は来ない。妃の一人に加えるか

人麻呂 大名児さんを呼びましよう。大名児

酒だ。酒をくれ。

か。つたら、どんな醜態を曝していたか。

が必要なんだ。暴動の時も、彼奴が居な

言葉も交わしてはならんだ。俺には大津

た。それがこの頃はどうかだ。近づくな、

の膝元で、まるで兄弟のように戯れてい

を聞いていたよ。あの頃が懐かしい。后

承知だった。ただニコニコと大津の言葉

と庇い通してくれた。后は犯人を先刻ご

があつた。それを彼奴は、自分がやった

事にしていた。匂玉を割ってしまつたこと

草壁 彼奴は優しい。子供の頃、俺が後の大

人麻呂 大津皇子は仰つていました。生涯か

を上手くまとめに行ける。

下手の台に大名児が浮かぶ。

大名児 要らないね、そんな窮屈なもん。も

う追いかけて無いでおくれ。私には惚れた

男が居るんだ。力づくで来ようもんなら、

舌噛み切って死んでやるから。

人麻呂 惚れた男ですか。

草壁 何処のどいつやら・・・。

上手、下手の台の人物達、消える。

津守連 暴動よりこっち自信をおなくしのご

様子。ここはお后様が支えなければなり

ますまい。

后 躊躇の時ではないようですね。

津守連 悪い芽は早く摘むに越したことはご

ざいません。

后 殺すのですか。

津守連 故なく殺せば、人々が黙ってはおり

ますまい。罪を犯して頂きます。

后 罪？

津守連 出来ませれば、謀反の罪。そうなれ

ば、大津様の周りの邪魔者達も一網打尽

・・・。

后 貴方と言う人は・・・。

津守連 すべてお后様、草壁様の御為を思え

ばこそでございます。おい。

男 足が現れる

津守連 この者も協力を申し出ております。

男 足 津守連様の取り成しにより、木材はす

べてお后様のご命令によつて移動させた

事にして頂きました。手足となつて働き

とう存じます。

后 今宵より草壁の為に私は悪鬼羅刹とな

りましょう。

津守連 おお、お后様の顔が、俄かに精気

に満ちて参りました。

第三幕

第一場

暗闇の中に萩野が浮かぶ。

萩野

ぬ岩の出現によつてせかれることはままあることとございませぬ。それが、すぐと元の一本の川に戻れば宜しゅうございませすが、二本の川となつて分かれてしまひますと、それぞれの方角に向かつて流れ始めます。これほど不幸なことはございませぬ。同じ一つの血の流れを持つ者が、再び血で血を洗ふことになるうとは……。

大津の館。大津と黒衣

大津 俺は大王の血を分けた実子だぞ。その子が面会が許されぬとは、何事だ。黒衣 天武の病状は相当に悪化しておるな。奴らは、お前に崩御（ほうぎよ）の時を知られたくないのだ。大津 それを機に俺が謀反を企てるでも思っているのか。草壁皇子への恭順を誓ったではないか。黒衣 幸か不幸かお前にや才がありすぎるんだよ。それが后ら一派の不安の種なんだ。大津 理不尽だ。俺は詩でも作っていれば満足な男だ。黒衣 理不尽こそ政の世界よ。権力を手中に収める為なら何でありなの。が政の世界だ。手を拱（こまね）いていて好いのか。后は俺を毘に落としたあの天智の娘だぞ。冷酷無比の血が流れているぞ。大津 天智の毘？ 黒衣 いや、俺の事などどうでも好い。天武が倒れてからこっち、全てのこととは後に

任せよとの詔（みことのり）が出たそう  
じゃねえか。このままじゃ後の思いのま  
まだ。ここは先手必勝だ。  
大津 叔母君は本来そんな人じゃないんだ。  
黒衣 権力は、人を変えるのさ。  
大津 どこかに誤解がある。話せば分かるは  
ずなんだ。  
黒衣 力と力のぶつかり合いにや、言葉は通  
じねえんだよ。  
大津 煩い。一人にしてくれ。  
黒衣 考えるな。行動だ。  
大津 消えろと言ってるんだ（刀を抜き、斬  
りつける）  
黒衣 （ヒラリとかわし）俺は黄泉の国の住  
人だぞ。そんなもんで、斬れるもんか。  
こら、止せ。止せよ。仕方がねえ。いつ  
たん消えるとするか（姿を消す）  
大津 （中空を睨み）叔母君。あの優しかつ  
た叔母君はどこへ行かれてしまったので  
すか。早く母をなくした私たち姉弟を子

と思つて育てましようとお誓い下すつた

叔母君は何処に行かれてしまったのです

か。

下手の台の上に后が現れる

后

焼野のきぎすは、己の子を助けようと、

翼で庇つて死ぬと言います。草壁に敵対

する者は、例え姉の子であるうと私が許

しません。

上手の台に大来が現れる

大来

大津。大津。貴方の身に何が起こつて

いるのですか。御神鏡に貴方の苦悶に満

ちた顔が浮かび出ています。飛鳥で何が

起こっているのですか。教えて下さい。

大津。大津。

大津

姉君！

第二場

夕方の小高い丘の上（中央の台）大名  
児と花萩

花萩 余磐（いわれ）の池が夕日を浴びてキ

ラキラと金色に輝いている。綺麗だねえ。

大名児 そんな事よりさっきの続き、教えて

下さいよ。大津というのは、近江のそれ

とは違うんですか。

花萩 筑紫の土地の名だそうだよ。半島の

戦いの時、天智の大王が大津の浜という

ところ、陣を敷かれたそうだよ。そこで生

まれたのが大津皇子。でも、変だよ。さ

つきからお前さんは大津皇子のことばか

り聞きたがつている。

大名児 確かに。でも、気にかかってしかた

ないんだもの。この気持、自分でも何故

なにか分からない。

花萩 初めは誘ったのに断ったって怒ってた

じゃないか。

大名児 意地でもこつちを向かせてやろうと  
思ってたんだけど。

花萩 恋だね、そりゃ。

大名児 恋？

花萩 胸の辺りがキュンと締め付けられるよ  
うなことが度々おきないかい。

大名児 まあ。

花萩 恋の初めには誰でも経験することさ。

大名児 やっぱり恋か。

花萩 当てて見ようか。この丘に毎日登って

余 磐の池の向こうにある大津皇子のお館  
を見つめ続けてるんだろ。あの人の姿が

一目でも見たいと思ってるんだろ。ま

さに恋に落ちたのさ。恋と言う奴は、人

間を変えるよ。鉄の心も高温でトロトロ

にとかしまうのさ。私も恋をして初め

てわかった。

大名児 高市皇子？

花萩 呑んべい皇子で有名だけどね。なんで

あんな皇子様に惚れたんだと言われても、  
その理由が自分でも分からない。危なっ  
かしくて、このまま放っちゃ置けないっ  
て気持ちなのかね。報われるはずのない  
恋なのに、つい世話を焼きたくなっちゃま  
う。  
大名児 報われない？  
花 萩 あの人には感謝はしてはくれない、私に  
心を開くということはないから拗ねているんだ  
位継承の資格がないから拗ねているんだ  
と言うけれど、私はそれだけじゃないと  
思う。あの人の中のには、忘れきれない  
女の人が、ずっと住んでいるだ。あの  
人に抱かれながら、私は何時もそれを感  
じてる。  
大名児 女の人の？  
花 萩 十市皇女（とおちのひめみこ）さ。若  
き日の大王と額田女王との間に生まれた  
皇女様だよ。  
大名児 壬申の乱でお亡くなりになった大友

皇子のお后様。

花 萩 二人は、幼い頃から恋い焦がれていたのさ。でも、大王はお許しにならなかった。た。無理矢理大友皇子に輿入れさせちまつたんだよ。そして壬申の乱だ。あの人には、十市皇女の命を助けようと近江の都に乗り込んで獅子奮迅の活躍をした。十市皇女は助かって、あの人はこの功に免じて大王が二人の仲を蔭ながらも好い、認めてくれるものと思っていたらしい。とところが、大王は、今度は十市皇女を齋宮にすると言い出されて・・・。

大 名 児 現 在 大 津 の 皇 子 の 姉 君 が つ か れ て い る 齋 宮 様 に ？

花 萩 違 う 宮 の 齋 宮 ら し い 。 十 市 皇 女 も 今 度 こ そ は 高 市 皇 子 と 思 っ て い た ん だ ろ う ね 。 こ の ご 命 令 に 絶 望 し て 、 と う と う ご 自 害 な さ れ て し ま っ た ん だ 。 あ の 人 は そ れ 以 来 酒 浸 り に な っ ち ま っ て ・ ・ ・ 私 は 永 遠 の 片 思 い さ 。

大名児 私も同じ永遠の片思いか。

麓に人麻呂と菊香が現れる。

花荻 おや、うまく行ってる二人が来たよ。

菊香 わア、綺麗な夕焼け。ね、ね、あの夕

焼けを歌に詠んでよ。

人麻呂 よし。うくん。

菊香 どうしたの、生まれないの？

人麻呂 歌と言うものは不思議なものさ。感

動して、それがすらりと言葉に出て来る

時もあれば、それが地下に溜まった水の

ように淀んでいて、ある日突然地上に吹

き上げて来る時もあるんだ。うくん。

菊香 それなら、もっと向こうまで行ってみ

よう。夕焼けに近づけば近づくほど言葉

になつて生まれて来るかもしれない。

人麻呂 ああ。

人麻呂と菊香は、手を取り合つて、走

り去る。

大名児 羨ましい。

花荻 一度は当たって砕けてみることだね。

そうしないと、後悔だけが残るよ。

大名児 後悔か。

花荻 どれ、私は行くよ。あの人、またどこ

かの家で、酒をせびっているに違いない。

家中の酒を呑まれてしまうと、訪問され

た方は大弱りさ。探しだして、館まで連

れかえらなきゃ。

花荻は、去る。

大名児 花荻さんも、恋では苦労してるんだ。

それにしても、あつちの二人は幸せそう

だね。面白くないね、まったく。まるで

つがいの蝶々のように戯れ合って走って

行くよ。

大名児は屈んで頬杖を突き、じっと大津の館の方に目を凝らす。風の音。夕霞の色が濃くなる。津守連が現れる。

津守連　こんなところに行ったのか。

大名児　お前は・・・。

津守連　任務はどうした？

大名児　草壁皇子なら籠絡するまでもない。

津守連　あれは大王の器じゃない。

津守連　我らが新羅王は、この国に英邁な王が誕生する事を最も恐れていたっしや。

　　。この国が再び半島に出兵する事の無いように願っているのだ。油断は禁物。

腕に撚りをかけて、草壁を籠絡しろ。

大名児　嫌だ。男はたくましいのが好い。

津守連　満足させて貰っておらぬのか。それとも儂のたくましが忘れられぬとでも（抱き寄せる）。

大名児　人が見る。

津守連　夕闇の中だ。気にするな（強く抱こ

うとする）。

大名児（抵抗する）。

津守連 国ではあれほど求めたではないか。

まぐわいの楽しさを教えてやった男の

味を忘れたか。

大名児 身体に触れただけで、鳥肌が立

つ。

津守連 何。ふん、男が出来たか。

大名児 草壁よりも、大津に大王になられて

は困るのだろう。私があいつを籠絡する。

好いだろ。やらせてくれ。

津守連（じつと大名児を見て）そういうこ

とか。

大名児 え？

津守連 大津に惚れたな。

大名児 ・ ・ ・

津守連 大津はわしの仕事だ。お前は草壁に

専念するのだ。それが不満と言うのなら、

即刻新羅の宮廷に戻るが好い。

大名児 嫌だ。大和を離れたくない。

風の音

津守連 ほほう、もってこいの風だな。

大名児 何を企んでる？

津守連 新羅の焼畑の方法に倣おうと思っ

な。まず周りから火を放つと、火は中心

に向かってその炎を伸ばす。中心におる

者はその火勢に耐えず、己が方からも火

を放ってこれに対抗しようとする。これ

が謀反だ。

大名児 大津の周りに火を放つと言うのか。

津守連 口外無用だ。口外する時は、身の安

全は保障しかねる。

大名児 だが、大津は切れ者だ。人望も篤い。

謀反を起こして大津の勝ちと

いうことも

津守連 仕上げをごろうじろだ。やはりお前

は国に戻って我らが新羅王に報告しろ。

すべてうまく運んでおりますと。命令だ。

行け。行くのだ。

大名児（心を残しながら去る）。

黒装束の鹿島と男足が来る。手に太い竹筒を抱えている。

鹿島 万端整いました。ごぞいます。

津守連 筒の中には越の国より献上された燃

える水が入っておる。計画に遺漏なきよ

うに。好いな。

男足 お任せ下さい。

津守連 行け。

二人、去る。夕闇の色益々濃く風の音が激しくなる中に、津守連がニンマリと立つ。

### 第三場

「火事だ。火事だ」の声。風の音。物

のはぜる音。下手奥の真木備の館が燃えて  
いる。中に戻ろうとする萩野。それを  
支える行心。

行心 いけません。火が強すぎます。

萩野 でも、あの人が・・・。

行心 真鳥殿が何とか致しましょう。

大津が走ってくる。

大津 真木備。真木備イ。萩野。真木備は、

どうした。

萩野 一度は外へ逃れました。たまたまのもの、

大王から壬申の乱折の授けられました。剣  
を持ち出したいと、再び炎の中へ。

大津 して、真鳥は？

行心 真木備様のお戻りが遅いので、これも

再び・・・。

火勢が増し、館の崩れる音

行心　　お。お。真木備様のお館が。・・。

大津　　爺イ。爺イ。

大津が火の中に飛び込もうとするのを、  
行心が必死で止める。そこへ磯成が足を  
引きずりながらやって来る

磯成　　川島皇子のお館にも火がかけられました

た。

大津　　何。何。

磯成　　幸いご一命は。・・。

下手から、真鳥が火傷を負った真木備  
を背負って現れる

真鳥　　皇子。伯父御が。・・。

大津　　爺イ。真木備。

萩野　　貴方。

真木備　　皇子様。真木備は残念でなりません。

皇子様が大王の位につかれる日を夢見て  
参りましたが、それも叶わず、このよう  
な仕儀に相成りますとは……。  
大津 気をしっかり持たぬか。  
萩野 貴方。貴方。  
真木 備もはやいけません。どうか、津守一  
派の企みにお気をつけ下さりませ。彼ら  
は、何よりも皇子様の天性の才を憎んで  
おります。どうかご注意怠りなきよう。  
・・。(こと切れる)。  
大津 爺イ。爺イ。  
真鳥 伯父御。  
行心 (脈を取り、首を振る)。  
萩野 (縋つて、号泣する)。  
黒衣が現れる  
黒衣 大津の即位を夢見た男が、黒焦げにさ  
れるとはな。哀れなことだ。

忍壁と音櫓が、川島を介抱しながらや  
つて来る。川島は目が虚ろ

忍壁 大津様。

大津 川島皇子。ご無事か。

川島 (虚ろな笑い)。

大津 ? . . .

忍壁 気が動転しております。

川島 ヒイッ (奇声を発する)

黒衣 だらしがねえ。たらありやしねえ。

真鳥 御免 (駆け出そうとする)。

大津 (慌てて支えて) どこへ行く。

真鳥 宮中に乗り込み、伯父御の恨みを晴ら

します。

忍壁 今飛び込めば、后方の思う壺ですよ。

真鳥 しかし . . . しかし . . .

大津 后方がやったという証拠はない。今は

自重するのだ。

磯成 お言葉を返すようですが、今やそのよ

うな時ではないと存じます。私も昨日征

矢を射掛けられました。幸い足に当って  
事なきを得たのですが・・・。  
音櫓 彼らは皇子の周りの者達を次々に襲っ  
ています。皇子の身に災禍が及ぶのは必  
定です。  
忍壁 手を拱いている時ではございませぬ。  
音櫓 皇子のご人徳をもつてすれば、地方の  
豪族達も呼応いたしましょう。  
真鳥 皇子。ご決断を。  
大津 待ってくれ。これは何かの間違いな  
だ。后に会って腹を割って話せば分か  
る事なのだ。  
黒衣 じれってえな。まだそんな事を言っ  
んのかよ。これだから頭でつかちはいけ  
ねえよ。  
津守連が、多波田、国麻呂、海麿、兵  
士を引き連れてやって来る  
多波田 ほほう、見事に焼け落ちましたね。

国麻呂 真木備殿には最早こと切れましたか。  
海麿 御気の毒なことです。  
津守連 真木備様のお館が出火と聞き、お后様から見て参れとのご命令で伺いました。  
真にご愁傷様で。真木備様は、大津皇子様にとつては育ての親同然のお方。暫く喪に服して宮中にはお出入りなさらぬのが肝要かと存じます。  
大津 何、出入りを禁じるだと。  
多波田 皇子様には、一味徒党を組んでの不穏な動きがあるとの風聞もございます。  
海麿 お后様にはいたく心を痛めていらっしやいます。  
国麻呂 裳に服して、少し冷静になられてはいかがかと・・・。  
大津 それは、私と后の仲を割こうとする者のしつらえごとだ。  
津守連 はて、どのどなたが・・・。  
真鳥 盗人猛々しいとはお前の事だ。  
津守連 真鳥殿に伯父御を亡くされて気が動

・ ・ ・ 。 転なされたご様子。ちとご乱心の体と・  
真鳥 己 ・ ・ ・ 。 （飛び掛ろうとする）。  
音櫛 （慌てて止める）。  
忍壁 向こうへ。  
音櫛 はッ（真鳥を連れて去る）。  
津守連 川島皇子には難を逃れて何よりの仕  
合せ。したが、よからぬ者に組して、命  
を落とさぬようにとのお后様からの伝言  
でございました（ジロリと睨む）。  
川島 ヒイッ（再び奇声を発して走り去る）  
磯成 皇子様。川島皇子様（慌てて追いかける）。  
津守連 それでは、失礼。参ろうか。わは、  
はははは。 （廷臣達を連れて去る）。  
行心 仏道に帰依する身としては申し難いこ  
となれど、事ここに至っては ・ ・ ・ 。  
大津 俺は詩の世界に遊んでいれば満足な男  
なのだ。何故俺の周りの者にまで危害を  
加えるのだ。俺に何の罪があるというの

だ。  
行心 皇子の存在そのものがあの方々には罪  
なのです。后には、草壁様を次の大王に  
即ける道しか見えてはおりません。善悪  
に関わりなく、障害になるものはすべて  
排除するご所存なのです。  
忍壁 どうぞ、ご決断を。  
大津 堪忍もこれまでか・・・。  
行心 真木備様をこのままにしてはおかれま  
せぬ。総ては皇子のお館で・・・。  
大津 (真木備を背負い) 爺、敵は必ずこの  
大津がとつてやるからな。  
黒衣 そうでなくちゃよ。は、はは。また  
多くの血が流れるぜ。こりや、たまらね  
えや。  
忍壁 同志を糾合いたしましょう。  
一人が残る。風の音。  
大津、忍壁、行心、萩野は去る。黒衣

黒衣 おや、また誰かやって来るぞ。

高市が人麻呂に負ぶわれてやって来る。傍に手に瓶子を抱いた花荻。高市は、酩酊状態。

高市 あはははは。見事にやられたな。  
花荻 人様の不幸をお笑いになっ  
てはいけません。

人麻呂 仏様の罰が当たります。  
高市 真木備は死んだのか。  
花荻 向うで人々が噂してました。

人麻呂 川島皇子はお助かりになりました。その  
うです。

黒衣 やれやれ、また酔っていやがる。  
高市 (背からずりおちる) 大津一筋の男であ  
った。さぞ無念であつたらう。おい、

酒だ。

人麻呂 此処でお飲みに？  
高市 供養の酒だ(花荻から瓶子を奪い、飲

高市 俺がいつ嘘をついた。

人麻呂 嘘じゃないでしょうね。

高市 草壁が悩む？ 最も縁のないことを始  
にいてやりとうございます。

高市 草壁が悩む？ 最も縁のないことを始  
めたもんだ。分かった。分かった。酒を  
調達して来たら、解放してやる。

高市 草壁が悩む？ 最も縁のないことを始  
にいてやりとうございます。

人麻呂 この頃私は草壁様が好きになりました  
た。心正直なお方です。今ご自分の地位  
にいてやりとうございます。

人麻呂 この頃私は草壁様が好きになりました  
り好いだろ。あんなご主人様よ

高市 俺の使用人になれ。あんなご主人様よ  
いい加減戻らしてください。

人麻呂 嫌です。私は草壁様の使用人です。  
高市 ならば、調達して来い。

高市 ならば、調達して来い。  
りませんか。

人麻呂 川島皇子のお館が燃えるの見物し  
ながら、すべて飲まれてしまったじゃあ

高市 どうしたのだ。

花荻 残念でした。残っていません。

もうとする。

人麻呂 言う事の、十中八、九は嘘です。

花荻 私もそう思います。

高市 何だ、花荻まで。すべては酒が言わせ

る事だ。気にするな。

人麻呂 行って参ります（急いで去る）

高市 お前も行け。

花荻 私も？

高市 酒は多く集めるに越したことはない。

行け。

花荻 はい。はい。

二人は、去る。

高市 花荻。何時も無理ばかり言って済まん

な。猿奴、草壁のお傍にいてやりたいか。

あは、ははは。なかなかいいところがある

わ。ウイ。遺憾、酔いが回ったらしい。

（大の字に寝そべる）。

黒衣 壬申の乱第一の勇者も、世の中が上手

く治まりだすと形無しだなア。

真鳥と音櫂が来る

真鳥 取り乱して申し訳ありません。

音櫂 皆様は引き上げたようだな。おや、ど

なたか……。

真鳥 高市皇子！このような所で……。高

市皇子様。高市様。

高市 おお、真鳥か。無念な事であつたな。

真鳥 ……。

高市 泣くな。益荒男（ますらお）には似合

わんぞ。

真鳥 お願いでございます。伯父御の敵討ち

の為にも、ことある時は大津皇子にお味

方を……。

高市 （ジロリと音櫂を見る）

音櫂 あの、私は大津様のお館へ。ご免（慌

てて去る）。

高市 馬鹿奴。味方と思つても気を許さぬの

が企みごとの要諦だ。

黒衣 ほほう、此奴、酔ってるようで、芯は醒めているらしい。

真鳥 それでは、御助勢が叶いますか。

高市 いや、そうはいわん。俺は負け戦には組しない方針でな。

真鳥 は？

高市 后方は周到だぞ。諸国の豪族に大津が皇位につけば、その權益を失う事になるうと喧伝しておるわ。

真鳥 それでは最早・・・。

高市 秀才だが、軍事だけはいま一つだな。

真鳥 叶いませぬか。(暗然となる)

高市 あは、ははは。がっかりしたか。だが、ここに大津の最後の一手がある。

真鳥 最後の一手？

高市 急に身体が火照って来たわ(辺りを見回し)風の一つも欲しいところよのう、真鳥。

第四場

真鳥 は？

高市 それも東の方から吹く風だ。

真鳥 東の方から吹く風？（ハツとして）伊

勢の齋宮大来様！

黒衣 成程。あの大乱の時、近江方に攻めら

れて、天武達が窮地に陥った事があった。

その時伊勢の神官達が大神の思し召しだ

と、いつて陣屋を見舞ったが、この国は神

と人とで治める国だ、伊勢の大神が天武

についたと噂が立って、地方の豪族がど

つと天武側に寝返った。

真鳥 それなら、その風が吹く時は？

高市 俺は負け戦には組しないと云ったはず

だ。

真鳥 有難うございます（勇躍去る）。

黒衣 最後まで言質を与えず、様子如何を見

届けてから身を処す所存か。いや此奴、

よつぼどの喰わせ者だなア。

大津 大王（天武）の寢室。薄暗い。中央の  
台の上に天武が眠っている。しきりにう  
なされている。ややあって、草壁、大津  
が入って来る。

大津 兄君、忝い。

草壁 俺のしてやれるのはこのぐらいのもだ。

后が、お前との仲を隔てている。

大津 兄君は別だと思っておりました。

草壁 不甲斐ない。日嗣皇子でありながら、  
今はすべての権力を后に奪われてしまっ  
てる。俺がお前の傀儡になるのが許せぬ  
と后は言うが、今俺を傀儡にしているの  
は后自身だ。后は変った。権力を手中に  
してからというもの、喜々として政に取  
り組んでいる。あんな精気に満ちた后を  
見るのは初めてだ。

大津 政に対する天賦の才をお持ちなのかも  
知れませんか。それが今の私には恨めしゆ

うございます。

草壁 ちよつとの間だけだぞ。

大津 はい。

草壁 は去る。入れ違いに黒衣が現れる

黒衣 どこまで人が好いんだ彼奴は。天武に

会わせるなど、敵に塩を送るようなもん

じゃねえか。

大津 兄君は無関係なのだ。もし今度の戦で  
俺が勝ったとしても、俺は草壁皇子を王

位につける。

黒衣 何だと。

大津 俺の敵は后とその一派だ。

黒衣 お前もお人好しだ。

大津 (奇声を発す)。

二人 (ギクリとする)。

黒衣 夢にうなされたか。

大津 大王。大王。

大津 (うつつすらと目を開ける) 大津か？

大津 はい。  
大王 何故見舞に来ぬ。言い置きたい事が山  
ほどあるのだ。  
大津 隔てる者があって、叶いませんでした。  
大王 隔てる者？  
大津 説明するだけの時間がありません。大  
王。大津は、浄御原の都を出奔致します。  
大王 何じゃと。  
大津 大王の顰（ひそみ）に倣い、吉野に身  
を隠します。  
大王 何故お前が。  
大津 生死の境にあります。真木備の爺も命  
を奪われました。  
大王 真木備が。  
か后と。  
大津 残念ながら。  
大王 何と言う事だ（思わず咳こむ）  
大津 （駆け寄り、介抱する）  
大王 許せ。病に倒れる前に策を講じて置く  
べきであった。

黒衣 英邁の誉れ高い大王様も、最後にしく  
じったという訳か。  
大王 だ、誰だ。そこにいるのは。  
黒衣 何だと。お前には俺が見えるのか。  
大王 ぼんやりだが、黒い装束をまとった男  
が  
黒衣 そうか。俺が見えるということは、お  
前、俺達の世界に足を突っ込んだな。  
大王 その声は有馬皇子！  
大王 有馬皇子！紀伊の藤白坂で誅殺された、  
あ  
大王 何故お前がいる。お前の恨みはすでに  
晴らしてやったはずだ。兄天智の作った  
近江の宮廷はことごとく破壊した。それ  
で成仏したのではなかったのか。  
黒衣 今となっちゃ、天智の事などどうでも  
好い。俺は  
大王 哀れさだ。お前に最もふさわしくな  
い言葉だ。そうか。あの時感じたことは、  
間  
違  
い  
で  
は  
な  
か  
っ  
た  
の  
だ。  
大  
津  
、  
こ  
の  
男  
、

お前に何を吹きこんだ。

大津 次の大王はお前こそふさわしいと。

大王 あの時とおなじだ。

大津 は？

大王 今こそ言おう。わしは初め、兄が望む

なら、大友皇子に政を任せても好いと思

っていたのだ。乱を起せば、苦勞する

のは民百姓だ。彼らに苦勞は掛けられぬ

と思っていた。ところが、この悪靈奴が

現れて、理不尽に屈するな、お前こそが

万民が望む大王なのだと言葉に唆されて、あの壬申の

わしはその言葉に唆されて、あの壬申の

大乱を……。

黒衣 悪靈とは何事だ。予言通り、お前は

王の地位を手に入れたじゃねえか。

大王 確かに王位は手に入れた。しかし、今

でもどうしてあれが避けられなかったの

かと悔やむ事が多いのだ。凄惨この上な

い、同じ血を分けた一族同士の戦いだっ

た。毎夜の夢に、あの時死んだ一族の血

に塗れた顔が浮かんで来る。あの時儂一人が姿をくらましていたら、あの戦は避けられたのではなかったか。多くの民に塗炭（とたん）の苦しみを与えずに済んだのではなかったのかと。黒衣 大津の志気を挫くような事を言うな。大王 大津、心して聞けよ。この男の目的は、断じてお前に味方する事ではない。この男は、世の中を混乱に陥れ、多くの血が流れるのが楽しくならないのだ。あの戦いの時、わしは初め、この男は兄天智に復讐する為に取り憑いたのだと思ってい。た。ところ、戦が進むにつれ、この男の異常さに気が付いた。あくなき血に對する執着だ。敵味方の差別なく、血を見ると、此奴は別人のように興奮する。流血そのものが目的ではなかったかと思わせる程、わしに敵の殺戮を命じたのだ。兄天智が、策を弄してまで此奴を葬り去ろうとした理由がやつと分かった気がした。

兄は、この男の性癖を恐れ、間違つて皇位に付つく事の無いようにと先手を打つたのだ。

黒衣 世迷い言をいうな。病人は黙つてる。

大王 いや、最後の氣力を絞つて言わねばならぬ。大津、此奴の言う事に耳を貸してはならぬぞ。

黒衣 早くくたばれ。老いぼれ奴。

大津 お前は黙つてる。

大王 心優しいお前が、謀反を企てるには止むに止まれぬ事情があるろう。今兵を起こせば、お前が勝つ事も充分あるかもしれない。だが、勝ちを収めたとして、その国づくりはまた一からの出直しじゃぞ。一族が二つに分かれて戦うのは止めてくれ。戦になれば一番苦労するのは田畑を奪われる民百姓じゃ。今この国は形を整えつつある。これを壊すな。下々の者に安息の日々を送らせる事がやつと出来てきた今、それが崩れ去ると思うと僕は耐えら

れぬ。済まぬ、大津。惨いようだが、この謀反思いとどまってはくれまいか。の馬鹿言え。お前は大津に死ねというのか。死んで貰いたくあるものか。儂がある時考えたように、一人どこかに身を隠して……。必ずや捕まえて処刑しよう。后は執拗だ。必ずや捕まえて処刑しよう。身を隠すは、大和の内とは限るまい。唐に渡れ。好きな詩を思う存分つくろが好い。大津！一刻の猶予もならん時だぞ。この危ないところであつた。俺は、多くの者を窮地に陥れるところであつた。己一人の恨みを空しゅうすれば、この国の平



卒弟から悪霊を・・・。

黒衣　（のたうち廻り、やがて消える）。

大王　消えたか。

大津　はい。

大王　大津。王位を継ぐ者は草壁だが、儂の

心を継ぐものは、お前だと信じておるぞ。

さ、行け。行くのだ。

大津　はい。

### 第五場

夜道。大きな月。大名児が走って来る。

後を追って刀を振りかざす覆面の男二人。

大名児は、短剣で応戦する。度々あって、

大名児は足を滑らす。斬りかかる男一。

次の瞬間、悲鳴をあげて、額を押える。

男一　どうした。

男二　礫（つぶて）が・・・。

大津が走って来る

大津 夜道で女を襲うとは何事だ。

男一 邪魔立てするな。

三人、切り結ぶ。ややあつて男達は、  
退散する。

大津 大丈夫か。

大名児 大津皇子！

大津 大名児か。

大名児 また助けて貰った。

大津 安全な所まで送ろう。

大名児 (凝ッと大津を見つめる)。

大津 どうした？

大名児 この国には最早安全な所は無い。皇

子。私は海を渡る。お願いだ。渡る前に  
一度で好い。私を抱いてくれ。

大津 礼のつもりか。

大名児 女子として、真実惚れた男に抱かれ

てみたいのだ。

大津　（じつと大名児を見る）俺も海を越えるかもしれない。一緒に行くか。

大名児　うれしい。

二人、抱き合い、やがて陰に姿を消す。

虫の声。ややあつて大津を探し求める磯成、音櫛の声。二人が、やって来る。

磯成　大津様。大津皇子様ア。

音櫛　どちらでございます。大津様ア。

磯成　どこに行かれたのだろう。

音櫛　磯成殿は向こうを。私はあっちの方を。磯成　心得た。へ共に去る。

再び虫の声。月が雲間に隠れて、ややあつて元に戻る。大津と大名児が現れる

大名児　身体の芯が未だに火照っている。こんな思いは初めてだ。

大津 月の光に照らされた、お前のうなじの  
何と白かった事か。  
大名児 大津皇子。  
大津 大名児。  
二人、再び抱き合う。磯成が来る。  
磯成 大津様。皆ぞくぞくとお館に集まって  
おります。真鳥殿も伊勢へ向けて出発致  
しました。  
大津 伊勢へ？（ハツとして）姉君を巻き込  
むつもりか。磯成。俺は奴を追う。皆に  
は至急武器を捨てて各々の館に戻るよう  
伝えてくれ。  
磯成 は？  
大津 謀反は中止だ。俺は大王の意思を継ぐ  
事にした。  
磯成 ？。。。  
大津 事情は後で話す。皆を解散させろ。急  
げ。

磯成 はッ（去る）。

大津 大名児。伊勢に行かねばならぬ。運が  
あつたら、海の向こうで逢おう。

大名児 大津皇子！

大津 さらばだ（去る）。

大名児 ああ、まだ大津皇子の残り香が、こ  
の身体に残って離れない。本望だ。もう  
私はどうなつてもかまいはしない。

### 第六場

下手前面に明かり。台上に后と津守連、  
台下に男足、鹿島。

津守連 どこへ向かったか分らんのか。

男足 申し訳ございません。

后 諸道に馬を走らせ、大津の足取りを掴  
むのです。同時に兵を集めて都の四方を  
固めなさい。

鹿島 はッ。さっそく兵に申し伝えます。

草壁 俺は日嗣皇子だぞ。俺の命令が聞けな  
いか。  
大津の館へ差し向けなさい。  
油断は大敵。后として命令します。兵を  
后 私達の目を欺く策略かも知れません。  
の命令だ。  
兵を動かしてはならん。日嗣皇子として  
草壁 あいつは謀反など起こさない。いいか、  
津守連 何だと。  
の館に引き上げまして・・・。  
男足 いや、それが如何した事か、それぞれ  
おるそうです。  
津守連 大津様の館には屈強の者達が詰めて  
草壁 大津は謀反など起こさない。そんな男  
に草壁。  
の声。上手前面に明かりが入ると、台上  
闇の中から「駄目だ。兵を動かすな」

后 私は后です。私の命令に従いなさい。  
男足 (判断に迷う)。

上下の明かりが消えると、中央に明かりが入る。巫女一、二を従えて大来が走り来る。後を追って真鳥。

大来 私には何も聞こえません。大津を次の大王にせよというお告げ等聞こえません。

真鳥 (前に廻り)皇子の為です。特別の御配慮をお願い申し上げます。

大来 私に嘘をつけと言うのですか。その嘘を世の中に広めろと言うのですか。

真鳥 伊勢の大神は大津様のお味方との斎宮様のお言葉があれば、諸国の兵が我が陣営に馳せ散じます。何卒大津様にお味方を。

大来 大津は何と言っているのです。大津がそのような事を言うとは思われません。真鳥 今や大津様は劣勢。大伯様は、たった

一人の弟をお見殺しになされるおつもり  
ですか。  
真鳥が近づこうとするのを巫女一、二  
が遮る。  
巫女一、二 いけませ。斎宮様に近づいては  
なりません。  
大来 何が何だか分かりません。まさか、あ  
の優しかった叔母君が大津にむごい仕打  
ちに出るなぞとは・・。大津もあれほ  
どお慕いしていたではありませんか。  
真鳥 后は子ゆえの闇に迷って、今や狂乱状  
態です。  
再び上下前面に明かり。  
草壁 俺は次の大王だぞ。  
后 構いません。兵を集めなさい。  
鹿島 どうしたらよかろう。

男足 うむウ。  
草壁 俺を無視するな。俺を軽んじるな。  
后 無視するのではありません。貴方の為  
草壁 俺の為と言いなから、その実俺に一  
后 それ。・・。  
草壁 母親でありながら、心のどこかで俺の  
事を馬鹿にしているのだ。才の無い奴と  
見縊っているのだ。  
后 そんな事はありません。  
草壁 それなら、何故俺に権力の一つも与え  
ない。后ばかりが、権力を恣のままにする。  
津守連 大器晩成という事がございます。皇  
子様はまさにそれ。実が結ぶ前に悪い虫  
によつて花芯が喰いちぎられぬよう、お  
后様はご庇護なさっていらっしゃるので  
す。  
草壁 大津は害をなす虫ではない。  
津守連 そうでしよるか。あの方は大王の位

を 狙 う ば か り か 、 大 名 児 の 心 も 奪 い ま し  
た ぞ 。  
草 壁 大 名 児 だ と 。  
津 守 連 あ の 女 は 、 最 早 草 壁 様 の 許 に は 戻 り  
ま す ま い 。 そ れ は 何 故 。 大 津 様 が 彼 女 の  
心 を 奪 っ た か ら に 他 な り ま せ ン 。  
草 壁 大 名 児 が 恋 し た と い う の は ・ ・ ・ 。  
津 守 連 兄 君 の こ と を 思 え ば 、 決 し て 手 出 し  
を し て は な ら ぬ 女 の は ず 。 そ の 女 の 心 を  
奪 う と は 、 不 埒 極 ま る と は お 思 い に は な  
り ま せ ン か 。  
草 壁 大 津 ま で が 俺 を 馬 鹿 に し て い る と い う  
の か 。  
多 波 田 、 国 麻 呂 が 来 る 。  
多 波 田 申 し 上 げ ま す 。 大 津 皇 子 の 行 方 に つ  
い て 訴 人 が ご ざ い ま し た 。  
鹿 島 誰 が 。  
国 麻 呂 川 島 の 皇 子 で ご ざ い ま す 。

津守連 喰いついて来たか。

男足 如何致しましょう。

草壁 糞ウ。大名児を・・。ええい、兵を

集めよ。大津を追い駆ける。

津守連 お許しが出た。急げ。

多波田・国麻呂 はッ。

再び中央に明かり。

真鳥 大来様、たった一人の弟君にお味方な

さろうとはなさらないのですか。

大来 私は大津の姉である以上に、今は全て

を伊勢の大神に仕える身なのです。私の

情を持ってご神託を左右する事は出来ま

せん。ああ、大津に会いたい。会ってあ

の子の心が知りたい。

大津が来る

大津 姉君。

大来 大津。  
大津 真鳥。姉君を巻き込んでならぬ。引  
大来 き上げるのだ。ご免。  
大津 お待ちなさい。大津、お前の現在の立  
場は真鳥の申しした通りなのですか。  
大津 おそらく間違っは……。  
大来 では、大神の言葉を騙って、世の中に  
号令を發せよという事は。  
大津 そんな事を申し上げたのか。  
真鳥 この一策が勝ち負けの分かれ目かと存  
じます。  
大津 馬鹿！（ピシヤリと打つ）。  
大来 乱暴はお止めなさい。それでは、貴方  
は命じていないのですね。  
大津 姉君を煩わす事、もともと考えはてお  
りません。  
真鳥 それではみすみす后ら一派に……。  
大津 それはもう好いのだ。俺は大王の心を  
引き継ぐ事にした。  
真鳥 大王のお心？

大津 折角の国の安定、崩してくれなとの  
願いであった。一族の分裂を避ける為、  
また下々の幸せを思つて一人どこぞに消  
えてくれたとの仰せであった。  
大来 父君がそうおっしゃったのですか。  
大津 最後の力を振り絞つて、頼む。頼むと  
・・。  
真鳥 それでは死ねと言つているようなもの  
でありませんか。  
大津 運が良ければ、外国へつくへ渡  
るやもしれません。  
大来 もう会えないと言ふことですか。  
真鳥 悔しゅうございます（嗚咽する）。  
大津 泣くな。すぐに浄御原にとつて返し、  
味方の者達の安全を図つてやらねばなら  
ぬ。ことによつたら・・。  
大来 大津。貴方は、その首を差し出すつも  
りなのですね。いけません。どうか外国  
へなりとお渡りなさい。

弓弦（ゆずる）の弾ける音。大津、矢

を掴む

大津 敵に囲まれたか。

兵士達の関の声

大津 神域を汚してはならぬ。真鳥、来い。

真鳥 はい。

大津 お待ちなさい。裏道をすぐに案内させ

ましよう。

大津 それでは、姉君が手を貸したことになる

りましたしょう。今回のことは、私一人が企

てたこと……。失礼します。

真鳥 失礼致しました。

二人、去る。

大津！（追おうとする）。

巫女一 お待ちください。斎宮様は、先ほど  
何と仰いました。すべてを伊勢の大神に  
仕える身だとは仰いませんでしたか。  
大来 ええ。  
巫女二 神に仕える身は、不浄をもつとも厭  
うもの。今やこの宮は、飛鳥の兵によつ  
て、十重二十重に囲まれておりましよう。  
巫女一 大津様が脱出を試みなされれば、多  
くの兵士たちの血が流れます。そのよう  
な不浄の場に斎宮様がお立ちなされては  
・・・。  
大来 だからと言って。  
巫女一 どうかご自重を・・・。  
大来 許して下さい。大津は、私にとって、  
たった一人の弟なのです。  
巫女二 お待ち下さい。  
巫女一 斎宮様！  
大来 は、振り切って去る。巫女たちは  
後を追う。

第七場

神宮外苑。大津、真鳥、兵士達と激しく切り結ぶ。

男足 罪人、覚悟。

大津 大津はまことの罪人ならず、罪は飛鳥

浄御原の宮中にある。そのことは、大王が誰よりもご存じだ。

鹿島 その大王はご崩御なされました。

大津 何。

隙を突かれて、大津は刀を落とされ、召し捕られる。

男足 大津皇子を召し捕ったり！

真鳥 ああ……。へたり込む。

転げるように大来が来る。

大来 大津。何もしてやれない私を許して下  
さい。へ身を投げ出して、激しく泣く。

### 第八場

第二幕第一場に同じ。夕景。上手に人  
夫や宮女などの大津を慕う人々。やがて、  
男足、鹿島を先頭に、多波田、海麿に前  
後を固められて大津が来る。兵士が後に  
続く。国麻呂が太鼓を打ち鳴らし、兵士  
二は大津を縛めている綱端を持っている。  
後を追って、人麻呂。

人麻呂 お待ち下さい。お待ち下さい（立ち  
はだかる）  
男足 邪魔をするな。

人麻呂 日嗣皇子様が参られます。

鹿島 草壁様が？

草壁が息を切らしてやって来る。

草壁 大津。許してくれ。女の事で、ついカ

ツとなつてしまつたのだ。今でも信じて

いる。お前は謀反人なんかじゃない。

大津 兄君。どうかご自分をお責めになりま

せぬように。

草壁 后が。・。・。后が。・。・。あんな母親

ではなかつたのに。

大津 大津が死ねば、お后様も元のお優しい

母君にお戻りになるでしょう。お願いし

たい事は一つ。謀反は大津一人の心の

中に兆した事。どうか周りの者達に罪が

及ばぬように。・。・。

草壁 うん。うん。

大津 日も西山に傾きだしたか。人麻呂、俺

の辞世だ。覚えておいてくれ。「金鳥（き

んう）西に臨（て）らひ鼓声（こせい）

短命を催す」。

人麻呂 太陽は西にあつて我が屋敷を照らし、

夕刻を告げる太鼓の音は、自分の短い命をさながら促しているようだ。

大津 「泉路（せんろ）賓主（ひんしゅ）無し、この夕（ゆうべ）家を離（さか）りて向かふ」。

人麻呂 死出の旅路には、客もなければ、主人もなく、我が身一人がこの夕景の中、家を離れて冥府へ向かおうとしている。

草壁 あの時、俺が兵を動かすよう命じなければ・・・。

男足 刻限が迫っております。引き立てろ。

行く。蔭で「大津皇子だ」「大津様」等の声。

草壁 大津。大津よオ。

人麻呂 いけません。刑場は不浄でございませぬ。

山辺が、髪振り乱しやって来る。後から萩野。すっかりと抱き止める

萩野 いけません。どのような事があるうと、

取り乱すなどのお言葉でございました。

山辺 死出のお伴を……。放しなさい。お

放しなさい。

萩野 いけません。いけません。お心お確か

に。

二人、争う。と一層大きく太鼓の音。

人々の嘆声。続いて大津の名を呼ぶ声や

嗚咽の声。

草壁 処刑されたか。

一同 (泣き声を上げて倒れ伏す)。

高市が走って来る。素面。

高市 遅かったか。

人麻呂 たった今・・・。

高市 聞け。津守連が大名児の手によって殺

された。

一同 ええ。

高市 大名児の訴えにより、彼奴が新羅の高

官である事が判明した。我らが朝廷の分

裂を画策する使命を帯びて潜入していた

のだ。大名児もその一味であつたが、大

津処刑の報を知り、難波津への途次、至

急舞い戻つて、犯行に及んだのだ。

草壁 嘘オ。

人麻呂 それでは、大津皇子は？

高市 総ては津守連の企みから発した事。罪

を許すとお后様からのご命令だ。

河辺 その皇子はすでに・・・。

人麻呂 何故にも少し早く・・・。

高市 残念だ。残念だ。

花荻 何てこつたい、罪のない皇子様を・・・

・。

一同 (激しく泣く)。

二上山の頂。抜けるような青空。中央の塚（高台）の周りに花をつけた馬酔木の木々。大来、真鳥、萩野が高台に向つて手を合わせている。真鳥は僧形、旅支度。鳶の声。ややあつて

大来　そうですね。河辺は気が触れましたか。

萩野　気がしつかり持つようにと何度も申しあげたのですが・・・。

大来　大津の死を認めがたかったのかも知れません。

真鳥　それでは、私はこれで・・・。

大来　本当に行つてしまふのですか。

真鳥　行心様が許されて、飛驒のお寺に移ります。私もそれに従います。

大来　新しい大王の誕生で、せっかく齋宮の職を解かれて飛鳥に戻つて来たというの

萩野 世間では、大津皇子の崇りだと申して  
た。と聞いております。  
責めになつて・・・。食も召されなかつ  
菊香 大津を殺したのは俺だと、ご自分をお  
を。追うように死んでしまつたとか。  
大名児 大津皇子の死後、草壁皇子もまた後  
人麻呂 お后様の特別のご配慮です。  
大名児 私がまさか許されようとは・・・。  
真鳥 大名児です。津守連の悪計を暴いた女  
？ の詩読ませて頂きました。そちらの方は  
大来 人麻呂とか言いましたね。大津の最後  
人麻呂 皆様、やはりこちらに。  
後に菊香が続く。  
人麻呂に手を引かれて、大名児が来る。  
しまうのですね。  
に、馴染みの人々は皆散りじりになつて

いるそうです。

真鳥 草壁様は、我々の助命の為に尽力下  
さいました。よもやそのようなことは・

大来 そうですね。あの人は、何時でも草壁  
皇子を支えて行くのが自分の勤めだと心  
得ていました。また草壁皇子の良さを一  
番よく理解していた人だと思えます。で  
すから、草壁皇子を恨みに思うようなこ  
とはありません。それより気にかかる  
のは、叔母君が毎夜毎夜高殿に登って、  
星を眺めていらつしやるとか。それは、  
まことのことですか。

人麻呂 新しい大王様には、あのことが余程  
菊香 仰る通り、高殿で毎夜お嘆きでござい  
ます。

台上に后が現れる  
辺りが暗くなり、満点の星空。中央の

后

もうあの星は光を失って見えなくなつてしまった。大津はもう死んでいるといふのに、もう一方の星だけがまばゆく輝いてゐる。これは何故？草壁が死んで、大王の位についたのは私。と言う事は、草壁の力を奪つていたのは私？そんな・・、そんな・・。ああ私は何と云う事をしてしまったのだらう。大津を失ひ、草壁までも失つてしまった。最早私を助けてくれる者はいない。

后は消え、舞台再び明るくなる

真鳥

新大王が、大津様の意見を取り入れる事になつたそうです。律の研究の為、鎌足様のご長男が遣唐使として派遣される事になりました。

大来

それは、好かつた。

人麻呂

大津様がご存命であればなられたで

あろう太政大臣には、高市皇子様が就任

なされました。

真鳥　ほんとに負け戦をなさらないお方だな

ア。

菊香　そう言えば、花荻さんは・・・。

舞台暗くなり、下手の台に灯り。旅姿

の花荻がいる。

花荻　あの人には、俺の妃にならないかと言っ

てくれた。でも、太政大臣の妃って器じ

やないよ、私は。それは、私自身が一番

知ってる事さ。私は、どうしようもない

飲んだくれの皇子様が好きだっただけだ。

お位の高い方の面倒は見きれないよ。そ

れに、大津皇子を見捨てたあの人を許せ

ない。女の感傷と言われるかも知れない

けどね。私は、明日香を捨てて、旅にで

るよ。

下手の明りが消えると、上手の台に明りが入り、気の触れた山辺の姿が浮かび上がる。

山  
辺

皇子はどこ。大津皇子はどこですか。  
ああ、大津皇子。へ幻の皇子に抱き着くが、すぐに皇子ではない。は、はははは。大津皇子は、どこ？、大津皇子！ああ、私は何をしているのだろ。私には見える。黄泉の国の入り口で、一人寂しそうに佇んでいるあの方の姿が。行心様を初めとして、皆様は獄舎に身を繋がれておいでの身。大津皇子のお傍に行けるのは、私一人。大津皇子、待っていてください。山辺がお供致します。へ懐剣を抜き、首を突く。

舞台、暗転の後に、明るくなる。

萩野 お側にお仕えしておりながら、申し訳  
ないことを致しました。  
大来 少しでも早く大津の許に行きたかった  
のでしよう。  
大名児 大来皇女。死んだ人もあれば、新し  
く生まれて来る者もあります。皇子は外  
国には渡れなかったけれど、代わりにこ  
の子が海を渡ります。(お腹を撫でる)  
大来 え。それでは、貴女のお腹の中には大  
大名児 一夜の情けで授かりました。  
大来 そうですか。それはよかったです。  
真鳥 でかしたぞ、大名児。  
一同 (笑顔になる)。  
大来 でも、その子も海を渡ってしまおうと、  
此処に残るのは私だけ。仕方がありません  
かね。大津を救ってやることが出来なか  
った私なのですから。  
真鳥 大来様。ご自分をお責めになっ  
てはいけません。

大津 ついでに詩も作ってみませんか。  
 草壁 うん。なかなか楽しいな。  
 大津 どうです、好いもんでしょう。  
 を垂れる。  
 中央の台に大津と草壁が現れ、釣り糸  
 人麻呂 釣りでもしながら、詩を案じていら  
 大名児 ああ、黄泉の国で、今頃皇子はどう  
 なに力強いことか。  
 ことを知る人が側に居てくれれば、どん  
 大来 ええ。ええ。そうして下さい。大津の  
 菊香 私も及ばずながらお力に・・・。  
 萩野 私が、末永うお傍にお仕え致します。  
 を弟世（いろせ）と吾が見む  
 身の人なる吾や明日よりは二上山  
 は日々を送ることに致しましょう。「現  
 大来 明日からこの二上山を大津と見て、私

草壁 いや、それは……。わしは、かもか  
もの口だから。  
黒衣が、同じ中央の台に現れる  
黒衣 敵同士じゃねえか。もつと争えよ、お  
前たち。  
大津 嫌だね。戦は大嫌いだ。  
草壁 同感だな、まったく。  
黒衣 どこか謀反を企てる奴はいねえかなア。  
大津 こうして二上山に神として祀られたか  
らは、誰に謀反など起こさせるものか。  
俺がこの飛鳥の土地を守ってやる。  
黒衣 退屈でいけねえよ（隠していた釣糸を  
指から垂らす）  
草壁 何だ。お前も始めるのか。  
大津 三人、釣り三昧と興じようか。あは、  
ははは。  
一同 （ハッとする）。

大来 今確かに皇子の笑い声が。

大名児 この辺りに来ているんだ。

一同 (辺りを探す)。

大津 皆、大津はここだよ。

草壁 大来。俺も居るぞ。

大津 大名児でかしたな。子供を頼んだぞ。

大名児 聞こえる。聞こえる。皇子の音が。

大来 大津。どうか皆を守って下さいね。

大津 守りますよ。この飛鳥の地も守ります。

飛ぶ鳥の飛鳥の地に、幼子の寝息が如き

平安あれだ。

一同 大津皇子！

大津 あは、はははは。

せらに中に・・・。  
一同が、大津のいる高台に再び手を合わ

幕

の  
名  
と  
し  
た  
。  
\*注。  
。「天武」  
は諡号だが、  
あえて生前